
けいおん！モブ王

ソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！モブ王

【Nコード】

N7276Z

【作者名】

ソウル

【あらすじ】

謎の死を遂げた主人公は共学設定のけいおんの世界に転生することに。

「やった！ 軽音部全員にフラグ立てまくってやるわ！」「いや、お前主人公じゃなくてモブだから」「な、なんだってー!？」

無慈悲な神は少年の夢をあっさり打ち砕く。しかし、モブならばモブらしくモブにフラグを立てるのみ！ モブの中のモブ。モブ王になるため、男は今日も奔走する！

「モブ王に、俺はなる!」更新は遅めです。「…………え?」

プロローグ（前書き）

少年は二次元の扉を開く……
モブキャラはまだ出ません。

プロローグ

常闇。

表現するならその言葉が妥当かと思う。

目を閉じたり開けたりしても視界に映る情景は変わらない。ひたすら真っ暗だ。手探りしてもなにかを掴むことはなく、空くうが手をすり抜けていく。

なにもないのだろうか？ さっきから足が地に着いている感触さえない。自分はいま、浮遊しているのだろうか？

どんな所で？ どのような状態なんだ？ わからない……。

まるで、水中を漂うクリオネになった気分だ。違うのは、自分で行き先を決められないということだ。ただ流れに身を任せている。そもそも自分の体は移動しているのだろうか？ ただフワフワと浮いているだけなのではないか？

途端、急な寂しさと恐怖を覚える。

いつまでこんな状態が続くんか？ ここから出たい。ここは暗くて静かすぎる。誰か、俺をここから救い出してくれ！

そう願った刹那、突如目の前に一筋の光が灯る。やがて、その光は大地から泉が溢れるように広がり、この暗黒の海を白光で満たしていく。

突然の発光の眩さで目を閉じる。やがて俺の意識も闇と同じく、光に包まれていった。

「目覚めよ。少年」

重苦しい声が耳に響き、俺の脳を覚醒へといざなう。

「……ん？」

目の前に映るのはさっきの常闇とは真反対の白い世界だった。雪原のように果てしない白。

さきほどの浮遊感もない。体全体が地に身を投じている確かな感触がある。どうやら俺はいま横になっているらしい。上半身だけを起こし、辺りを観察する。

「どこだ？ こっ……」

「少年よ。こっちだ」

「っえ？」

再び重苦しい声が俺に語りかける。体中に振動が伝わるほどの音量なのに、声の持ち主らしき姿は見当たらない。

「誰だ？ どこにいる？」

「こっちだ、こっち」

「こっちって、どっちだよ？」

さっきから首を動かして360度を見回すが、ただ真っ白な空間があるだけである。

「だぁー……っ！ もう！ 少しは神っぽく語りかけているのに、

いい加減気付け！！ 下だよ！ 下！ しーっ！ たっ！

下？ そういえば俺どこに座っているんだ？ なんだかやけにぶにゅぶにゅしている土だが……。足場の独特な手触りをさわさわと動かし確かめる。

「や、やめろ！ こそばゆいだろろっが！」

そして気付く。ばかでかい声は足場から聞こえているということに。俺は視点を下に移すと……。

「さっさと降りろ！ 小童が！」

巨大な人間の顔が、これまた巨大な鼻に腰を据えている俺に非難する目を向けて怒鳴る。

……って、はい？

「きゃあああああああつ！ 化け物 つ！！！」

「失礼な。私は神だぞ」

ふんっ！ と言って顔を揺らし鼻から俺を離れさせる巨人。俺は面白いようにぴゅーっとなんでいく。

「ぐわっしっ！！！」

なにもない空間にも関わらず、壁のようなものに顔面が激突する。

「まったく、人が……じゃなくて神が休憩中に昼寝をしているときに突然鼻に落っこちてきおって。罰当たりにもほどがある」

「あがが、ががががが……」

胡坐をかいて溜息をつく巨人に、痛む鼻を押さえながら震える俺。

「それで、お前何者だ？」

「こっちのセリフだ！」

なに俺の方が異邦人みたいな扱いになってんだよ！ アンタの方が規格外で異常な存在だろ！

「つか、そんな濃い顔で見下ろさないで！ 影かかって怖すぎる！」

「き、気にしていることを……ちっ！ ちょっと待て」

そう言つと巨人の体は空気が抜けていく風船のように縮んでいき、俺と同じくらいの背丈になる。

「これでいいか？」

「あ、ああ……」

しかし縮んでも顔濃ゆいわ……。なんというか、北斗 拳に出てくるキャラクターのようだ。ちなみに「あたたたたたたたつ！」と言う方じゃなくて「ひでぶっ！」とか叫んでやられそうなタイプ。すなわち雑魚キャラ臭がする。

「で、お前なに？」

その雑魚キャラ臭がプンプンする濃い顔で頭を傾けて尋ねる自称神。気色悪いにもほどがある。つーか……

「だからこつちが聞きたいんだよ！ それは！ てか小さくなれるなら最初からその姿で出てこいよ！ 心臓止まるかと思ったる！」

「止まるもなにも……、お前とつくに死んでいるだろ？」

「……はっ？」

なに言ってるんだ？ この「ひでぶっ！」野郎は。俺が、死んでる……？

「お前は、もう死んでいる……」

「あべしっ！ ……じゃなくて、どういうことだよ！」

「そのままの意味だ。ここは魂だけが辿りつける場所……生と死の狭間の世界だ。いまのここにいるお前は魂だけの存在。つまり、死んでいるってことだ」

「……」

そんな馬鹿なことが、とはつきり否定ができない。足場のない暗い空間。巨大な人型から小さくなることができる自称神が住む白い空間。さつきから非現実な出来事が起きている。とすると、本当にここは死後の世界だって言うのか？

「お前は、もう死ん……」

「二度もやらんでいい！」

人がシリアスになつているところで同じボケをする神に一喝すると、「私雑魚キャラじゃないん……。そりゃあ神の間じゃ各位は低いけどさあ、雑魚じゃないもん……。」といじけ始める。他の奴らにも小物扱いされてるのか、コイツは。

「……とにかく、仮に俺が死んでいるとして、アンタは俺を天国か地獄に行かせる神、ってところか？」

「なんの話だ？」

「えっ？ だって、アンタが俺をここに連れてきたんだろ？」

「違うぞ。お前が勝手にここに入ってきたんだろ。第一、人は死んだら魂の状態からやがて完全な無になるのだ。お前たちが言うような天国とか地獄と言った概念は存在しない。……まあ、未練がある魂を救済する、罪のある魂を裁くということはしているがな。そう意味では天国と地獄と言うかもしれん」

どうやら俺がここに来たのは神にとって不本意のことらしい。

「普通なら、魂をこの空間に招くという行為は私の意思で行われる。誰でもが来れるわけではない。私が選別した人間しか来れないはずなのだが、お前は自分自身でここまで辿りついた。……とすると、よほどの未練があつてここに来たということになるな」

未練……。死んでも思い残すことがあつて、あの世に行くことができない。いまの俺はそういう幽霊のような存在らしい。

けれど、俺が思い残していることってなんだ？ そりゃこんな若

さで死んじまったら、いろいろ未練はあると思うけど……。

「どれ。お前の記憶を見て、どんな未練を持っているのか調べてみよう」

神が俺の頭に手を置き、目を閉じて調べる素振りをする。選ばれた人間しか来ることができないこの世界に、自力でやって来るほどの未練とは……。

「ええと、なにになに？ 死ぬ間際にお前が無意識に強く思ったことは……」『「けいおん！」のような世界でリア充になりたかった……だっさ」

「ぶーーーーーーーっ！」

盛大に吹いた。そりゃ吹くわ！ なに考えてんの！？ 死んだときの俺！ 普通、自分の生まれ育った場所とか家族のことか思いやりませんか？ もうすぐ命が消えるというシリアスな場面でそんなこと思うとか情けなさすぎだわ！ いや、「けいおん！」大好きだけどさ！ それにしまったって最後の最後まで二次元に現実逃避ですか！？ 俺！

「いやあ、欲望に忠実だなお前。呆れるけど……。まあ『けいおん！』がらみの未練じゃないとここには来れないだろうと思っていたが、案の定だったな」

「えっ、どついう意味だそれ？」

俺が尋ねると、突然、神は眉間に皺を寄せ、キリッ！ とした真面目な顔になる。濃い顔がさらに濃さを増して非常に気持ち悪い。

「名乗るのが遅れたな……。我こそは『けいおん!』の世界を司り、『けいおん!』に関わるすべての事象を管理する神! 『けいおん神』になり! ひれ伏せ人間よ! お前たちが崇めてやまぬ『けいおん!』の命運は我が手に握られている。崇めるならば我を崇めよ! さすれば、『けいおん!』の世界は今後も発展を続け、無限の繁栄を約束されるであろう!」

「……」

黒い仮面に黒いマントをした厨二病の反逆者が、「日本人よ。私は帰って来た!」と高らかに手を上げるシーン連想させるその出で立ちに呆然とするわたくし。

「どう? かつこよかった?」

「どや? と言った感じでいまだに眉間に皺を寄せた状態でこちらに顔を向ける『けいおん神』。

「痛い……」

「ん? どこか痛むのか?」

「いや、アンタが」

指を差して正直な感想を言うと、ズーン……と体育座りして落ち込む『けいおん神』(笑)。

あの厨二発言が本気でかつこいいとも思ったのだろうか?

「つーか、なんだよ『けいおん神』ってのは?」

「言葉通りの意味だ。私は『けいおん!』という創作作品から生まれた世界を管理する役割を持っている」

「いや、全然わかんないし。現実世界を管理しているってことならイメージできるけど、『けいおん!』っていうのは作り話だろ？架空の作品の世界を管理するってどういうことさ？」

フィクションでよく見る因果律を調整する神とかみたいな奴ならまだ理解しやすい。しかし、「けいおん!」から生まれた世界の管理と言われてもいまいちピンと来ない。

「確かに『けいおん!』は人の空想から生まれたものだ。しかし、空想であるものが現実存在であるお前たち人間に認識されているということは、それは『現実の事象』と言えないか？」

「『現実の事象』？」

「そうだ。『けいおん!』はまずマンガから始まったな？この時点で『けいおん!』は『マンガ』という現実のものとして世界に存在しているんだ。続いてアニメ化。お前も知っている通り、この『アニメ化』という現象によって『けいおん!』は大ブームになり、オタクから、そういうのとはまったく縁のない一般人、分け隔てなく多くの人間に認知されるようになった。それから多様なグッズの発売。バンド結成が多発するという社会現象。声優たちによるライブ……」。

ここまで来ると『けいおん!』という空想話は十分すぎるほどに現実浸透していると言えないか？

現実生きる人間が空想の世界を現実の一部にする。空想の世界は現実の人間に認識されることによって『現実の事象』となる。たと

え作り話だとしても現実世界に含まれているのならば、その架空世界は『在る』ということになる。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。話が急に突飛しすぎて訳がわからねえよ」

いや、なんとなくは理解できる。けれど哲学的すぎていて漠然としか理解できない。

『けいおん!』の世界を管理するという具体的なイメージに結びつかない。

「ふむ。そうだな。例えば、お前は『けいおん!』がどういう話かは知っているよな?」

「そりゃ最初から終わりまで見てるからな」

二期の最終回を見たときの感動はいまだに忘れられん。

「そしてお前の他に『けいおん!』を見た人間と『けいおん!』の話題で会話したとき、お前が知っている『けいおん!』と相手の知っている『けいおん!』の話は一致する」

「そりゃ同じ番組見てるんだから、当たり前だろ」

「……じゃあ、もしその中でまったく内容が違う『けいおん!』の話をする人間がいたら?」

「はっ? どういうこと?」

「『けいおん!』はバトルアニメだ。『けいおん!』はスポ根アニメ」

メだ。『けいおん!』は男女とのラブストーリーだ……と『けいおん!』の原型をとどめていない話を語っている人間が現れたとする
どう思う?」

どう思うもなにも……。

「『けいおん!』ってのは軽音部のメンバーで展開されるほのぼのアニメだろ? バトルとかスポ根とかの要素なんてどこにもない。俺が話しているのはアニメで放送された『けいおん!』の話だ。仮にそんな発言する人間がいたら、にわかか、ただの冗談だろ。つーか、同じ『けいおん!』を見ていたらそもそも、そんな連中現れないだろ?」

「なら、そいつらが『自分が昨日見た“けいおん!”こそが本当の“けいおん!”だ』と主張してきたらどうする?」

「えっ?」

「お前はほのぼのとしたのが本当の『けいおん!』だと言うが、向こうはバトルをしている『けいおん!』が本当だと言うのだ。さてこれはどちらが間違っているのだ?」

「そんなの向こうに決まって……」

「いや、どちらも正しいんだ。お前は前日にほのぼのとした『けいおん!』を見て、一方はバトルものの『けいおん!』を見たんだ」

「はあ?」

ますます訳がわからない。

「認識の相違。話の食い違い。なぜこのような現象が起きるのか？
……それは、『けいおん！』を構成する世界の因果律が崩れているからなのだ。」

二次創作、同人誌というものがあるだろう？　すでにある原作を題材にして自分で話を作るという行為だ。出版社に投稿するというようなことをしない限り、趣味の範囲で好きに書くことができる。だからバトルものやスポ根ものや恋愛ものといった、原作の面影もない話だつて作れる。だがこれが本当の『けいおん！』とは思わないだろう？」

「当たり前だ。二次創作なんだから。原作との区別くらいできる」

「確かにお前たち人間はそうだ。だがな、『世界』そのものはそう認識しないのだよ」

「世界」そのもの？

「人々の空想から生み出され、現実中存在する『けいおん！』は、やがて一つの小さな世界となる。目には見えないが、確かにあるのだ。『けいおん！』に関わる要因はすべてこの『けいおん世界』に凝縮される。アニメ化。グッズ化。ライブ化。映画化。そういった情報がすべて集まって、そのまま現実に干渉する」

「それ、無意識の集合体つて奴か？」

いつの日だったか、心理学の本で読んだことがある。人の心は深いところでもみんな繋がっているのだと……そんな内容だった。

「そうだな。この『小さい世界』というのは人々の深層心理によつ

て創られている。人々が無意識化で認知している『けいおん!』の情報をもとめている空間だ。少しでも『けいおん!』に関わる情報はすべてここに集まる」

「……なんか、とんでもなく壮大な内容だけど、まあだいたいイメージはできた。けれど、それがさっきの内容の食い違いとどう関係す……」

「言っただろう? 『けいおん!』に関わる情報がすべて集まると。ならば二次創作、同人誌の内容もこの世界に取り込まれることにならないか?」

「……あ」

つまり、コイツが言いたいのは……。

「人間は、原作者が書いたオリジナルと原作を参考にしたオマージュの区別は付けられる。だが分け隔てなく情報を収集する世界そのものにはそういった『区別』という行為はない。例え原作とまったく違う話でもそれが『けいおん!』であるならば、『けいおん!』の一部となる。つまりオリジナルとオマージュがごっちゃになってしまうのだ。そして、そのごっちゃになった情報はそのまま外部……現実世界に表出してしまふ。ここでさっきのような矛盾が発生する。ほのぼのとした『けいおん!』とバトルものの『けいおん!』が同時に存在し始めるのだ。これはどちらが本物だとか偽物だとかの話にはならない。一度『現実』として表出したものは、そのまま『事実』になってしまうのだ。

もし内容が変わった『けいおん!』を見たとする。それを見た人間は、もともと知っていた『けいおん!』の情報を書き換えられ、その『けいおん!』がオリジナルだと認識するようになってしまふの

だ。なぜならその者にとって、その『けいおん!』が現実でありオリジナルだからだ。

だがそれでは辻褄が合わなくなる。合致しない内容。統一されない認識。いつしか『けいおん!』は荒唐無稽な話になり、小さい世界だけではなく、現実世界にも支障をきたす」

「…………その事態を招かないために、あんたたちがいるのか」

「ようやく理解したか。私の役目は『けいおん世界』の因果律の調整…………つまり世界そのものにオリジナルと二次創作を分別させて、現実世界の人間の認識に矛盾を発生させないことだ。これは『けいおん!』だけではない。すべての創作作品に言えることだ。

それに、例えば二次創作がない作品でも、人々が無意識でイメージしたオマージュ…………『こうなつたら、もつと面白そうだ』といった考えや、『ってどんな話なんだろう？ こういう話かな?』といった無知からのイメージも含む。だからいくら作り話と言っても、現実干渉しているものならば、我々神が手を加えないわけにはいかないのだ」

…………納得はできたが、やはりとんでもない話だな、と思う。というか、こいつら神が因果律の調整をしなければ二次創作との区別も付かなくなるだなんて…………。

俺がいままで好きだったマンガとかアニメとかも、本当にオリジナルのものだったのか不安になってきた。ていうか…………。

「ずいぶんと文化的な神様なんだねー、あんた」

「…………なんだ？ なにが悪い？ 神がアニメの世界を司っているのがそんなに滑稽か？」

「……わかってくれる？ 本当にごここまで来るのに苦労したんだよ……」

「ああ、あんたも大変だったんだな」

落ち着いたのか、また小さくなって正座するけいおん神。俺もなんとなく正座になって対面する。その後、俺は『けいおん！』の魅力について盛大に語り、けいおん神に同志として認められ固い握手をした。

「さて、これからのお前の処遇に関してだが……」

「あつ……」

そうか、すっかり忘れていたが、俺死んでるんだった。

「どうだ？ お前の未練、叶えてやってもいいぞ？」

え？

「『けいおん！』の世界でリア充になりたいんだろう？ 未練ある魂を救済するのも私の役目だからな」

「叶えるって……どうするんだ？」

「転生さ。お前、『けいおん！』の世界に転生してみないか？」

プロローグ（後書き）

プロローグというよりは説明ばっかだったな……。

次もまだ神との対談です。モブ娘が出るのは2話目になります（遅いなあ……）。

拙い文と更新も不安定ですが、感想があれば頑張れます！

すみません。媚びました……。

意見、感想、改善点がありましたら遠慮なくよろしくお願いします。

第一話「転生！」（前書き）

あれ？ プロローグと大して内容変わらないか？

第一話「転生！」

「お前、『けいおん！』の世界に転生してみないか？」

転生。

死んだ後、またなにかに生まれ変わるという概念。

これは再び生まれるという意味の「再生」ではなく、再び存在する「再有」という語を使うらしい。主に仏教に見られる概念だが、古代ギリシャの宗教思想にも「転生」についての散見が認められている。

だがけいおん神が言っている転生は少し違う。

マンガやアニメの世界に現実の人間がオリジナル主人公として原作の世界に行くという二次創作におけるジャンルのことだ。つまり二次元に行きたいという願望の究極体と言える。

「えっ？ ちょっ！ マジで？ マジで『けいおん！』の世界に行くんの！？」

「私を誰だと思っている？ けいおん世界を司るけいおん神だぞ。人の魂をけいおんの世界に転生させることなど容易にできるわ」

「……き」

「ん？」

「転生キタ

っ！！」

あまりの嬉しさでその場で踊り、舞い、側天する。だってそうじゃない！ ずっと憧れていた「けいおん！」の世界に行けるんだぞ！

？ 主人公として！ マジ俺勝ち組じゃないか！
うおおお！！ 燃えてきた！ ようし！ 主人公補正で軽音部員
の皆にフラグ建てまくってやる！
特にムギとか、ムギとか、ムギとか、ムギとか、ムギとか、むぎ
ゆづりゆづりゆづり！！

「ああ……喜んでいるところ悪いが……」

「おお、なんだ？ あつ！ そうか！ 『けいおん！』に原作介入
するには音楽の能力が必要だよな！ ようし！ けいおん神！ 俺
に音楽の才をくれ！」

楽器と言えばリコーダーしか経験ないからな。ちなみに楽譜も
まったく読めない。唯のように絶対音感なんてチート能力もない。
ここはご都合主義とも言える神の力で音楽の才能と知識を提供して
もらうしか……

「いや……あのな、お前原作介入できないんだよ」

………はい？

「つつか、メインキャラとも関われない」

……顎が外れるのではないかというぐらい口が開く。特に意味は
ないが首を動かして周辺を見渡す。はやり白くて白くくい景色しか
ない。まあ綺麗〜うふふ……。
さやかな笑顔で再びけいおん神に視線を向ける。

「こつち見んな」

「待ていつ！ なんだそれ！？ 原作介入できないって！ なんのための転生だよ！ えっ！ メインキャラとも関われない？ 俺とムギのハッピーライフは！？」

主人公補正は？ チート設定は？ ご都合主義は？ ハーレムは！？

「しょうがないんだよ……。最初にも言ったが、ここに来れる魂は、普通なら私が選んだ人間だけ……。つまり、主人公になるのに相応しい素質を持った人間だけを呼ぶんだ」

主人公の素質？

「もともと原作にいないはずのキャラクターが原作に関わって話を変えるっていう行為は因果律を狂わせるからな。そういうことにならないために転生させる人間には神の力を少し分けるんだ。そうすると向こうで原作介入して話が変わっても、お前が言う主人公補正で自動的に因果律の歪みを調整するんだ。するとその『けいおん！』の世界は原作にはない『IF』の世界になる。オリジナルとは関係ない、別の世界として進行していくんだ。

……だがなあ、この神の力というのは誰でも許容できるわけではないんだ。ほんの一握りの人間だけしか使えないのだよ。

神の力を取り込める人間。主人公の素質を持つ人間。原作介入することが可能な才能と素質を持つ、未練のある人間の魂……。これを私が選定し、ここに呼び、転生させる。普通ならこれがセオリーなのだ……。」

ええと……。つまり……

「残念だが、お前に主人公の素質はまったくなくて、ない。行っ

たとしてもせいぜいモブキャラなんだよ」

……「こうはつきり言われますと、なににも言う気が起きない……」。

「自力でここに来れるだけで十分なイレギュラーかと思っただが……、いかんせん特出したものがないなあ。どうやらただの執念だけでここに辿りついたみたいだな……。逆に大したもんだ」

かつこ悪すぎじゃないそれ……？

「ま、待ってくれ！　もしかしたらその神の力とやらを奇跡的に許容できるかもしれないよ！？　俺！　やってみないとわかんないじゃん？　ねえ！？」

「……やってみてもいいが。許容できなかったらお前、『A K R A』に出てくる鉄　の暴走状態みたいになるが……それでもやるか？」

「すみません。やっぱいいです」

いまだにトラウマなんですアレ。

……しかし、主人公になれる人間っていうのは、もともと才能があつて神に愛されている次元の違う人間のことだったのね……。

「つかモブキャラって……転生する意味ねえじゃねえかよ……」

「なにを言っている？　むしろ好都合じゃないのか？」

「えっ？」

「思い出せ。アニメの『けいおん!』に登場するクオリティ高いモブキャラたちを」

ああああああああああっ!! そうだよ! 「けいおん!」の隠れた名物、モブキャラを失念していた!

「けいおん! モブキャラ」について説明しよう。

本来ならアニメにとって背景であるところのモブキャラだが、京二の細かいところまで手抜きをしない恐るべき技術力によって生み出されたモブキャラたちは、総じて容姿のクオリティが高く、個性があり、隠れたファンがいるほどなのだ。

第二期ではかなり描写が増え—(特に唯たちのクラスメイト)、名前も設定も決められ、セリフまであるのだ。

第一話からネット上で話題になり、「特定班」と呼ばれる猛者たちが、公式発表の前に名前を明らかにしたり、登場シーンをまとめたり、最終回の色紙に書かれた一人の一人のメッセーヅまで調べられるほどの注目を浴びる。

いまでは、モブに関連する動画、モブ専門の絵や同人誌まで出ているほどだ。モブにするにはあまりにもつたいない! 言わば「けいおん!」の裏のアイドル!

「お、おい! 俺がモブキャラということは、二期に登場する三年二組のモブキャラの女の子たちとは関わることはできるよな!?!」

「モブ同士だからな。もちろんできるぞ」

「フラグ建てられるか!?!」

「それは……お前の頑張りしただいな、うん」

「深い関係になれるか!？」

「報われればな……」

「つ、つまり恋人になれる可能性があるってことだよな!？」

「あ、ああ。だからお前の頑張りしただい……って、近い近い」

お、おお！ 軽音部にフラグ建てることしか頭になかったが、モブキャラたちだって十分魅力的な女の子たちじゃないか！ 確かにムギと恋人になれないのは辛い(いやほんと)、それに目を瞑れるほどの幸福が待っているかもしれないではないか！

ようし！

「けいおん神！ 決めたぜ！ やっぱ『けいおん!』の世界に行つてモブたちとウハウハな生活を満喫してやるぜ！」

「どつどつと言うことじゃないと思うが……。まあ決心できたらのならいい。せつかくの二度目の人生だ。大いに楽しむがいい。

ああ、言い忘れたが、『桜ヶ丘高校』は女子高ではなく、最初から『共学』という『IF』設定のけいおん世界に送つてやるからな」

あつ、そつか。共学じゃないとモブキャラたちと知り合えないもんな。

「あれ？ でもそれって原作を大きく変えていることにならないか?」

「そこはもうすでにオリジナルと独立した『けいおん世界』だから心配ない。

他にもバトル要素がある『けいおん世界』、ファンタジー要素がある『けいおん世界』に送ることだってできるんだが……まあこんなに原型留めていない世界に行けるのはよほどの転生者だけだな。ま、どこに行っただとしてもお前はモブだ」

ああ、そうですか……。

「それに、『共学』程度の設定変化の調整ならもう慣れてる。ほとんどの二次創作が共学設定だからな。『共学』という要素がある『IF』のけいおん世界にお前を混ぜて、因果律が狂っても、すぐに修復できる。……普通は転生者が勝手に修復してくれるから、私は楽できるはずなのだがな……」

「すみませんねえ、主人公になれない器で……」

「……あと、転生させる前にお前には話さなければならぬことがいくつかある」

えっ？ まだなんかあるの？

「お前にはいくつか条件……いや、制限が与えられる」

おいおい。ムギと関われないだけでも辛いのに、これ以上制限あるのかよ……

「さっき、お前はメインキャラと関われないと言ったが、正確に言うところ“関わってはならない”と言っべきだな」

「関わってはならない？」

「神の力を持つ転生者が原作介入し、話を変えたら『IF』の世界が発生すると言ったな？　だが神の力を持ってないお前はそれができない。つまり、モブであるお前が本編のシナリオに関わり、話を変えてしまうと、そのけいおん世界の因果律が大きく狂ってしまうのだ。お前がこれから転生する世界も、『共学』という変更設定があるだけで、原作に限りなく近い世界だ。その世界も例外ではない」

「ああ、そうか……。ん？　ちょっと待て。モブが本編に関わっちゃいけないって言うが、モブが軽音部に接触している話だってあるぞ」

とくに「部室がない！」ときの回や文化祭なんてモロに話に関わっている。

「いや、それは元からモブが関わるといふシナリオになっているからだ。簡単に言うと、ドラマで必要な配役として登場しているんだ」

ああ、なるほど。だいたいわかってきた。

要は、「けいおん！」という物語が一つの撮影ドラマとしたら、本編の撮影中にいないはずの配役……。つまり俺が入ってはならない。そしたらNGでカットされてしまう。

その「カット」という現象が、因果律の崩壊というわけだ。

「なんかそう聞くと、『けいおん！』のキャラクターってシナリオ通りにしか動かない人間のような気がするけど……。えっ？　まさかRPGのキャラクターみたい決められたセリフしか言わないなんてことないだろうな？」

いくら話しかけても、「先生、さようなら」としか言ってくれないなんて虚しすぎるぞ！

「んなわけあるか。『けいおん世界』のキャラクターたちはモブも含めて独立した存在だ。そうじゃないと『IF』の世界が発生しないだろう」

よかった。それを聞いて安心した。

「あれっ？ でも、俺がシナリオの配役として登場できないってことはさ。本編が始まったら一言も話しちゃいけないってこと？」

「だから何度も言わせるな。要は本編のシナリオを変えなければいいんだよ。モブは背景なんだから、背景キャラが会話してたって声は拾われない。まあ例外としてモブが配役として発言しているときにお前が話しかけるのはダメだがな。」

とにかくメインは軽音部なんだから、モブがピックアップされることはない。安心しろ」

……そういう言い方はなんかひどいような気もするが、まあモブなんだもんな、俺。

「じゃあ、お前が守るべき制限をまとめると……」

1、軽音部を始め、メインキャラとサブキャラに関わってはならない。

2、本編のシナリオを変えてはならない。

3、配役として登場しているときのモブに話しかけてはならない。特に3は注意しろ。うっかりお前が本編に登場するとそれだけでアウトなんだからな。あくまでモブらしく背景に徹しろ。

これを守らないと、そのけいおん世界は大変なことになる……。私だってすべてサポートできるわけではない。取り返しのつかない状態になってしまったら、私でもどうすることもできない」

言い訳ではなく、本当に限界があるという態度だった。

いくら神でも万能ではない、ということか。……いや、「万能の神」という概念自体が、俺たち人間が造った勝手な思い込みなのかもしれない。そんな都合のいい存在は、もともといないのかもしれない。

「……わかった。気をつける。しかし……本当、『けいおん!』そのものにはまったく関われないわけですね俺は……」

「まあ、これさえ守ればあとは自由だ。好きにやれ」

「もち! モブキャラの間で俺はリア充になってやるぜ!」

「よし。それじゃあ転生の準備をするが、本当にいいんだな?二度目の人生を送ることに後悔しないか?」

からかいではなく、真剣に聞いている空気がひしひしと伝わってくる。

だから俺も真剣に考えるが、答えはすでに出ている。

「『けいおん!』の世界に行けるのに、後悔なんてするはずないだろ?」

それに、いまさらあんな闇の中に戻って、徐々に消えていく方がずっといやだ。

「よろしい。では……行ってこい。モブの中のモブよ」

白い世界で新たな色が含まれる。けいおん神の手から虹色の光が現れたのだ。

その光が俺を包む。そして、遠い遠い先に俺を運んでくれる
感触を肌で感じる。

とても暖かい、心地良い光だ。

自分が胎児のころを覚えてはいないが、母親のお腹に入っている
ような安らぎがあった。気持ちの良い眠気とともに俺は意識を閉じ
た……。

なんか、だいぶキャラの濃い人の間で生まれてしまった気がするが、俺の第二の人生はここから始まるのだ。

俺はモブとしてしか生きられない。だがモブはモブの間で輝けばいいのだ。メインキャラになれないからと言っても、充実した生活はできるはずだ。

俺は無事にやってきたこの「けいおん世界」で高らかに宣言するのだった。

「おぎゃ〜ぎゃぎゃ (モブ王に) おぎゃぎゃぎゃっぎゃっ (俺はなる)！」

とりあえず、早いとこ赤ちゃん時代を終わらせたい……。

第一話「転生！」（後書き）

ようやく転生しました。

次回ようやくモブ娘の登場です。

ご意見、ご感想お待ちしております！

第二話「幼馴染！」（前書き）

ようやくモブ娘登場です！
先陣を切るのは……

第二話「幼馴染！」

俺が「けいおん！」の世界に転生してから、早くも五年の歳月が経った。

この世界で俺が授かった名は「小野光真^{おのこうま}」。現在、五才。精神年齢は聞いちゃダメ。

さてなぜ赤ん坊時代からいきなり五年経っているのかというと、俺にとってあの時代は早く忘れ去りたい黒歴史だからである。

頭の中は大人だというのに小便大便が一人でできず、飯も誰かに食べさせてもらうしかない。赤ちゃんプレイなんてものがあるらしいが、それを一年間続けたらたまったもんじゃない。というか、泣かなきゃなにも伝えられないとは、なんと不便なことか。

俺は自らの脳が幼児に退化しないよう自我を保つことに労力を一生懸命費やした。なんともハードな年月だった……。

しかし、いいこともあった。俺の母親……小野明子^{あきこ}というのだが、これがとんでもない美人で性格もよく家事も得意な良妻賢母なのだ。この人の……まあ、赤ん坊だからこそ許されるアレを含んだときは役得というか、ラッキー　と歓喜してしまった。

血のつながった母親なのが少し残念だったりする。

しかし、女神のような母の旦那がどうしてあんな男なのか……。

……父親に関してはまた近いうちに話そう。ちようどお客さんが来たようだし。

「コウく〜ん」

俺の部屋に入ってきたのは、俺と同年のおさげ髪の子。お

隣の木村さん家の一人娘で、幼馴染である木村文恵だ。

そう、あの「生焼けおさげ」こと木村文恵は俺のお隣さんなのだ。三年二組のモブキャラたちと関わるのは最低でも高校を入学してからと思っていたのだが、それは杞憂に終わった。まさか幼馴染として、さっそくアイドルモブと出会うとは思っていなかったが。

ちなみに「生焼けおさげ」の由来は、アニメ第一期の文化祭で、唯のクラスが焼きそば屋をやっていたとき、ブレーカーが落ちて「生焼けになっちゃう」と言ったことから。

そういえば文恵って二期にも登場したのに、一期しかセリフないんだよなあ……可哀想に。

「おう、どうした文恵？」

「明子さんがね、アップルパイ作ったから食べようって。一緒に行こうっ。」

「よっしゃ！ 母さんのアップルパイー」

お隣ということもあって俺と文恵は毎日のように遊んでいる。

高校生の文恵も可愛いが、幼い文恵も可愛いなの。癒しを感じさせる物腰はすでにあって、俺の心のオワシスとなっている。こない子と幼馴染ってだけで転生してきた甲斐があるというものだ。

「どうしたの？ コウくん。私の顔なにかついている？」

「あっ、いや、文恵は可愛いなあ〜って思っただけ」

「えっ！ あ、ありがとう……」

つつい顔を凝視してしまつてとつさの言い訳　いや本音なの
だが　を言つてしまい、顔を紅潮させる文恵。

「ほんと可愛いなあ。文恵は〜」

あまりの愛らしさに文恵の頭をナデナデする。

「も、もうからかわないで！　はずかしいよう！」

ブンブンと怒つてしまふ文恵だが、残念ながらその仕草さえも可愛らしい。

まあ、これ以上からかつたら本当に嫌われてしまふから、この辺で自重しておこう。

「ごめんごめん。ホラ、アップルパイが冷めちまうから行くぞぜ」
手を差し伸べて文恵に謝罪する。母さんの作る料理やお菓子はなんでも上手いが、特に俺はアップルパイがお気に入りだ。出来たてのうちに食べたい。

「う、うん」

ぎゅっと俺の手を握つたとたんなぜか笑顔になる文恵。これは、まさか……

（早くアップルパイが食べたかつたのか？　文恵も食いしん坊だな）

なぜだか、白い空間にいるけいおん神が呆れの溜息を吐いたよう
な気がした。

その後も、俺と文恵はおままごとや、一緒に絵本を読んだりとか、年相応の遊びをし、幼馴染イベントの記録を増やしていくわけだが、実に頭を悩ます事態も起こるわけだ。

文恵は生まれてから五年の歳月しか経っていない。まだ善悪の区別が付かない無邪気な子どもだ。

だが俺は違う。肉体は五才だが、中身は立派な大人だ。つまり羞恥心の差がある。それが最も顕著に表れるイベント。

一緒にお・フ・ロだ。

「ねえ？　なんで一緒に入っちゃダメなの？　泥だらけなんだから二人で入ろうよ」

公園で砂遊びした俺たちはお互い泥んこで汚れていたの、母さんに風呂に入るよう言われたのだ……。

泥んこで頬を汚している文恵はまだ羞恥心がないお子様。だが俺は顔だけではなく、心まで汚れきつちまっている邪念の持ち主。幼女の文恵の裸体を見てしまった日にはどうなってしまうことか。

いや、別に幼女趣味があるわけではないよ？　問題は相手が文恵ということだ。

将来の成長姿をすでに知っている相手の成長過程にある未熟な肉体を見るといふのは、なぜだかともなく背徳的な罪悪感が湧く。

「いや、だって俺は男。文恵は女の子だし、一緒に入るのはおかしいだろ？」

「でもコウくん。『光真はよく明子さんとお風呂に入って鼻の下伸ばしてる』っておじさんが言ってたよ？」

おおおやああじいい！！

五才児の女の子になに言っとんねん！ いや事実だけどね！

だってまだ五才だもん俺！ 親と一緒に入ったっていいじゃないか！ べ、別に下心があるわけじゃないよ！ 一児の母にしては若い肌だなあ、とか思ってたないもん！

えっ？ 親父とは入らないのだった？ いやだよ。

「女の人の明子さんが入っているんだから、私と入るのも同じですよ？」

うぐうぐ……。子どものくせに合理的なこと言いおつて。

俺は理性をフル動員させ、ぐずる文恵を説得したが聞かず。

結局「私のこときらいなの？」と泣きだしてしまった文恵に、慌てて「水着ならOK」と言ってしまう、一緒に入ることになった。そのときのイベントは母さんが写真に撮って、アルバムに張られることになる。

「このときからコウくんって、子供のくせに変に嗜たしなみがあったよね」

とアルバムを見ながら顔を赤くする文恵に感謝の言葉を贈られるのはまだ先の話。

季節は流れる。

幼稚園や小学校で過ごした時間は、楽しさ七分、悲しさ三分といった感じで、走馬灯のように過ぎてしまった。

もともと俺は学校のような集団行動を強制させられるような環境は好きではなかった。前世はそのひねくれた性格のせいでいろいろ苦勞や損をした。

だから第二の人生ぐらいは素直になって子ども時代を満喫しようと思ったのだ。なにより、文恵がいつも傍にいてくれたおかげで、毎日は充実していた。

文恵との関係は中学校に上がっても良好だった。普通異性の幼馴染同士がこの年になると、周りの目を気にして疎遠になってしまうものだが、俺と文恵はそういった恥ずかしさは特になかった。

けれど、日々女性っぽくなっていく文恵を見ると、どうしても異性として意識せざるを得ない。それは文恵も同じようで、昔のように遠慮のないスキンシップというのは出来なくなっていた。まあ、それでも仲のいいことに変わりはない。たまくにケンカすることもあるが、それはお互い心を許し合っているからと言えよう。

基本的に謝るのは俺だけだね……。

ああ、ちなみに平沢唯と真鍋和は幼稚園からずっと同じところに通っている。もちろんけいおん神の言いつけを守って、接触はしていない。まあ、あの二人の回想シーンに入り込むことに注意すれば問題なからう。

しかし、傍から唯を見てみると本当に変わり者だなと思う。というより天然の領域を超えている。あれでよくいじめに遭わないものだとつくづく思う。普通なら浮いてクラスからハブられるもんだが……。

文恵曰く「いつまでも小さい子どもみたいでかわいい」とのことだが、決して誉め言葉ではないと思う。

本編の主役である奇想天外な平沢唯の成長記録を遠目で観測しつつ、モブの身分である自分の小ささを悲しみながら、超常現象も起さない平和なけいおん世界は回っていく。

でもって、ただいま体育の時間。項目は体育館でバレーボール。

ちなみに女子とは合同。半面を使ってクラス交代形式でやることになっっている。いまはネットを用意したり、得点板を運んだりと準備中だ。

俺はネットを結び終えたところで、体育用具倉庫室からボール入れを押し運んでいる文恵の姿を確認する。

「お〜い。手伝うぜ文恵」

「あつ、ありがとうコウくん」

うむ。ブルマ姿がとても輝かしく似合っているな文恵。

そんな格好で笑顔を返されると、つい鼻の下が伸びてしまう。ブルマから伸びる健康的な生脚が実に艶めかしい。

「……なんか視線がやらしいよ？ コウくん」

「い、いや〜！ そんなことないぞ！ ごほん！ ていうか、こんな力仕事、体育委員に任せればいいのに」

文恵は献身的というのか、他の奴が面倒に思うことを率先してやるタイプなのだ。そこが魅力で好かれる要因になっているのだが、正直いいように使われていないか心配である。

「あつ、文恵ちゃん！ こっちにボール一つちょうだい！」

女子が使っている半面コートから、女子二人組が文恵に手を振る。

「うん。行くよ〜！」

両手を上げひょいっと、いかにも女の子らしい投げ方でボールは

飛んでいく。フォームはバレエ部員と比べると立派なものじゃないが、ボールは空中で綺麗な弧を描き、ばっちり女子の手に渡った。ありがとうとお礼を言っているが、今運んでいるんだから、もうちょっと待ってればいいのに……。

「……ねえねえ。やっぱり文恵ちゃんと小野くんって付き合ってるのかな？」

「うんうん。いつも一緒だもんねえ。なんかラブラブって感じ？」

きゃあきゃあ、と勝手に盛り上がる先程の女子二人組。本当、女の子って恋話好きだよな。けれど、できれば本人たちがいないところでやってほしい。

ほれ、文恵が顔を真っ赤々にしてしまったではないか。

「気にすんなよ？ あんなの」

「う、うん……」

……しかし、転生したばかりの頃は、三年二組のモブキャラたちにフラグを建てよう、などという野心に燃えていたが、いまは心境の変化が起きている。

すなわち、このまま文恵と恋人になれるのではないか、という考えが頭を巡っている。

文恵とはこっちに転生してからずっと一緒だった。彼女のことはきらいじゃない……むしろ好きだ。けれど、どうだろう。そんな簡単に告白して付き合っているものだろうか。

もう一つの心境の変化は、モブキャラたちに対する見識の変化である。

俺はいままで画面越しの存在だった彼女たちを、言ってしまえばギヤルゲのような攻略対象の女の子としてしか見ていなかった。

だがいまは違う。いまここにいる木村文恵という女の子は一人の人間だ。けいおん世界に転生した時点で彼女たちはフィクションの存在ではなく現実の存在だ。そのことを失念していたのである。

文恵といなかったら、そんな当たり前のことすら気付かなかったかもしれない。彼女たちを都合のいい存在として扱っていいはずがなかった。

だから、俺の一時かもしれない気持ちを押し付けて、文恵を傷つけるようなことはするべきではないし、したくなかった。なにより大事なのは文恵自身の気持ちだ。

文恵は大らかというか、断ることが苦手な女の子だ。俺が告白したとして、本当はいやなのに了承してしまうかもしれない。

「なあ、文恵つていま好きな奴とかいるか？」

「えっ!？」

だから少しでも、文恵の本心が知りたかった。

「ど、どうしたの? 急に」

「あ、いや。俺たちよくカップルって噂されるじゃん? もし文恵に好きな奴がいたら、迷惑になるんじゃないかなと思って……」

そう言った瞬間、文恵は悲しそうな顔になって俯いてしまった。

ええ! なんで!? まずいこと言いましたか俺!?

「……コウくんは、ああいう噂、迷惑なの?」

「えっ？」

「わ、私と恋人同士って言われるの、いやなのかな？」

若干、潤んでいる瞳で俺を見つめる文恵。
なんかドキドキ。

「あ、いや！ そんなことはないぞ！ ただ文恵はどうなのかなって気になっただけで……」

「そっか……」

今度は安心したような表情になって、笑みを浮かべる。

「私は、別に迷惑じゃないよ。ああいう噂されるの……」

「えっ？」

そ、それって、まさか文恵は俺のことを？ そんな幼馴染のお約束が成立しているともいうのか！？

「ふ、文恵……」

文恵に手を伸ばそうとしたそのとき……バシーーーーーッ
！！！ とバレーボールが剛速球で俺の横顔に直撃した。

「コ、コウくん!？」

「おお！ 和ちゃん和ちゃん！ 私スパイク打てたよ！」

「ラインの中に入れなきゃ意味ないでしょ？」

遠くから聞こえてきたのは興奮してはしゃぐ平沢唯と冷静なツツ
コミを入れる真鍋和。

つか人にボール当てといて謝罪はないのか？ モブか？ モブだ
からか？

「コウくん！ しっかりして〜！」

その後、軽い脳しんとうで保険室に運ばれて、俺はしばらく気を
失っていたらしい。

結局、あのととき文恵の気持ちを確認することは、それからはずや
むやになつてしまった。

けいおん神よ。俺はメインキャラの邪魔はしていないが、向こう
が俺の邪魔をしているぞ？

第二話「幼馴染！」（後書き）

というわけで木村文恵ちゃんの登場回でした。

彼女の印象は一期からのものですが、表現できているのかどうか…

…。

ご意見、ご感想よろしくお願いします。

第三話「受験！」（前書き）

クリスマスなんてなくなればいいんだあ！
三話目です。文恵ちゃんは心のオワシス。

第三話「受験！」

早いもので、中学三年生になった俺達には受験という避けられない大イベントが到来した。

受ける高校はもちろん桜高だ。けいおん神の言う通り、ちゃんと女子高から共学ということになっている。

だが元はやはり女子高だったらしく、今でも男子の比率は女子と比べて低いらしい。

「あんまり男の子の友達できないかもしれないよ？」

共に桜高を受ける文恵は、そのことを心配しているようだった。

「じゃあ女の子の友達百人作ってウハウハになる」

「もっ……」

場を和ますジョークとわかっているのか、本気で呆れているわけではないようだ。

ただいま俺の部屋で、文恵と受験勉強中だ。

文恵は最近、受験に対する緊張と勉強の焦りのせいなのか、少し疲労の色が窺える。俺が冗談を言っているいまでもペンを休めず、問題を解いている。

(焦る気持ちはわかるが、無理はしてほしくないな)

とか言う自分も他人事ではないのだが。

(桜高つてやっぱ難しいんだなあ。こんなに苦勞して勉強することになるとは……)

よく唯と律が合格できるもんだ。そういえば大学入試も三年の後半で勉強し始めたにも関わらず受かったんだよなあ……。普通ありえねえって……。それもメイン補正とでも言うのか？

コンコン！

「はい」

「お茶持ってきたわよ。少し気分転換したら？」

母さんが紅茶とサンドイッチを持ってきたので、お言葉に甘えることにした。

「二人とも。がんばることも大事だけど、詰め込みすぎて体を壊した方が問題なんだから、ちゃんとこまめに休憩とるのよ？」

「あいよ」

「は、はい。ありがとうございます」

多分、母さんは遠まわしに文恵に注意してるんだろつな。さすが母さんだ。文恵が無茶してまで勉強していることに気付いている。

逆に俺は勉強時間より休憩時間の方が長いです

……みなまで言うな。わかってる。このままじゃマズイのは…。

「よろしい！ それじゃ、しつかりね？」

母さんは心から安心させてくれる笑顔を見せて部屋を出て行った。

「明子さんって、いつまでも綺麗だよねえ？」

「だよなあ。十五歳の子どもがいるとは思えないぜ」

なんせ俺を生んだときから、まったく容姿に変化がないのだ。美人な母を持つ身としてはいつまでも綺麗でいてほしいが……もしかして母さん不老か？

というより自分は母の年齢すら知らない。母親とは言え、女性に年を聞くのは失礼だと思っていたので、聞く機会がなかったが……親父……。まさか犯罪じゃないだろうな？

「どうしたの？ コウくん」

「いや……なんでも」

とりあえず母さんの若さの秘密について考えるのはよそう。なんか危険なおいを感じるし、才色兼備な母に不満はないしな。

(しかし、本当になんであんなにすばらしい女性の相手があんな男なんだ？)

そんな俺の思考が奴を呼び寄せたのか。または近づいているが故に俺の脳内に浮かんだのか。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！ と階段を速足で昇って、こちらに接近してくる轟音が耳に響いた。

これは、まさか！ アイツか！？

バアアアアアンツと乱暴に開け放たれたドア！ その前に君
臨する巨体の男！

「コウの字〜〜！！ ただいま〜〜！！ パパだよ〜〜！！」

俺の父。小野光輝（ホシキ）がそこにいた！

いやああああああああ！ やかましいのが帰ってきてやがった
よ〜〜！！

顔だけ見ると威厳たつぷりなラウのような面構えをしていると
いうのに、口を開くとハイ！ 残念！ と叫びたくなるぐらい口調
が陽気で、アンバランスな声を持つこの男が俺の父で母さんの夫な
のだ！ 世の中理不尽だ〜〜！！

「おお〜〜！！ 文恵ちゃんも来ていたか！ いらっしやあああい！
！」

「お、お邪魔ましています。おじさま……」

「いやあ、仕事が忙しいせいでしょう会ってなかったねえ！ い
つのまにかこんな美人さんになっちゃてえ！ 小さい頃からかわ
いかったから予想はしていたがねえ！ まったく光真もいい娘さん
に唾つけたんもんだ！ 来年は花も恥じらう女子高生かあ！ うん
いいねえ！ この響き！ 女子高生〜〜！ おお！ そういえば女性
は十六歳で結婚できるではないか！ 光真！ 安心しろ！ 式の準
備はパパに任せ……お〜つと！ お前は十八歳じゃないとダメじゃ
ないか！ いやあはははは！ 失念！ 失念！ まあ二年の歳月ぐ
らい我慢しなさい！ ただし避妊はちゃんとしろよ！？」

「どこまで話飛んでんだよ！！ つかいきなり帰ってきてマシंगा

ントークかましてんじゃねーよ！！ 話の半分ほとんどセクハラだし！！ こちとら受験勉強でピリピリしとんじゃあぁぁいい！！」

まったくなんでこの人は久々に帰ってきては、こうぶつ飛んだ話を一呼吸もおかずベラベラしゃべるのか。こんなんでも仕事ができる人だから余計にタチが悪い。

ちなみになんの仕事をしているのかは知らない。ただ出張がかなり多く、帰ってくるのは稀だ。

親父曰く「ミステリアスな男の方がイケメンだろ？」らしい。

そして、俺は親父をかつこいと思つたことは一度だつてない。

つか変なこと言うせいで、純真な文恵が湯でダコみたいになつてるぞ！

「なんだ？ なんだ？ 父親が息子と義理の娘の幸せを願つてなぐにが悪い？」

「文恵は義理の娘確定かい！」

「あぁん？ お前はこんない子に不満があるというのか！？」

「不満とか満足とかの話じゃなくて、文恵の気持ち考えろつての！」

「ほう……。お前はそう言うが、お前自身はどうなんだあ？ 文恵ちゃんのことどう思っているんだあ？」

「は、はあ？」

な、なに言いだすんだ突然！ 本当に親父は！ 文恵だつて困つて……

ずれ過ぎだ。

「は、はい。よく知っていますから、気にしないでください」

「ありがとうございます　じゃあがんばってね？」

と言って、親父のシャツの襟元を掴み、引きずって部屋を出ていく母さん。いいざまだクソ親父。

「あつ、ちなみに私も二人の仲には賛成よ」

母さん！　最後に爆弾投下して行かないでー！！

「……………」

ほら、気まづくなってしまうたではないか……………。

「あ、あの……………文恵？」

「……………よ」

「えっ？」

「そろそろ勉強しよ？　ねっ！」

「あつ、ああ……………」

と言いつつも、結局その日は問題が頭に入りませんでした……………。

しかし、試験は待ってくれない。

講習と学校の先生に出された数々の難問を解き過ごす日々、いよいよ試験当日となった。
き、緊張しますなあ。前世で受験の経験をしていても、この緊張には慣れない。

「ふ、文恵、大丈夫か？」

「う、うん」

桜高の正門で立ちつくし、緊張をほぐそうとするがお互いなかなか落ち着けない。

「そ、そうだ！ 唯ちゃんに聞いたんだけど、手にカボチャって書いて飲み込むと緊張しなくなるって……」

「文恵！ それカボチャちゃう！ 書いて飲み込むのは『人』や！ カボチャは『お客さんがカボチャ』やろ！？」

油性ペンで手のひらにカボチャの字を書こうとしている文恵を、なぜか関西弁で阻止する。緊張のせいで少々冷静さを失っているようだ。

ていうか唯！ 文恵に変なこと教えんといて！

大丈夫かなあ……。

自分のことより文恵が心配だ。

だがこれまでちゃんと勉強してきた分、本番では落ち着いて問題が解けたようだ。

で、俺はと言つと……

「もうおしまいだ〜！ あの問題は間違いないだし、あそこもきつと間違ってるだろうし！ もういやだ〜！ ぼくお家帰るう〜！」
「とっくにお家だよ」

自室の床でぐるぐる転がり、絶賛反省中だった。
試験の後って、急に冷静になってあれこれ考え込むんだよな。

「ほら元気だして？ コウくん。前半の問題はスラスラ解けたんでしょ？ なら大丈夫だよ！」

「そうかな……」

「そうだよ」

……うむ。文恵にそう言われると本当に大丈夫な気がしてきた。
やっぱり文恵には相手を安心させるような力を持っているな。
……手にカポチャ書こうとする慌てんぼさんだけど。

「ふう……よし！ 反省タイム終了！ やれることはやったんだ！
後は堂々と結果を待っていればいい！」

「うん。そうだね」

「そうと決まれば、心置きなく羽目を外すか！ ほんじゃ、溜めめたゲームを一気に消化すんべ！」

「普通は出かけるとかじゃないかな……？」

そして合格発表日。

「というわけで文恵……代わりに見てきてね……」

「堂々と結果待っているんじゃないの？」

だってここで落ちてたら、俺のモブ人生がバッドエンドなんだもの……。

ネガティブオーラー全開で立ちすくむ俺に、他の受験生がその不運な空気を移されないよう避けて通っていた。

「ほぐら。怖い気持ちは、ここに来てる皆おんなじだよ？ 私が付いてるんだから、ねっ？ 勇気だして見に行こ？」

「……うん」

まるで母親が子供に言い聞かすように手を差し伸べてくれる文恵に、ついつい幼稚な返事してしまったが、いまはものすごく彼女に縋りたい気分だ。

ああ、やっぱり文恵は心のオワシスだ……。

いまここで「俺、高校受かったら文恵と結婚するんだ」と宣言したくなるぐらい頼もしくて、愛おしく思う。

……アレ？ 死亡フラグ建てちゃった？

「はい着きましたよ」

わーいありがとう文恵ママあ。すんげー見るの怖いわー……。

「もう、手で目隠さないの!」

「だってよ……」

「そんな弱気なコウくん、きらいになっちゃっしょっ」

「いやでいれるー」

条件反射でつい目元に置いていた手を離してしまった。

もう後戻りはできない。目の前には無数の受験番号と受験者の名前が並んでいる。その羅列が視覚に広がり俺の脳に焼き付く。

「ええと……。あつ! あつた! 私の番号あつたよコウくん!」

自分の番号がった文恵は俺の肩を掴みはしゃぐ。

対して俺は石像のごとく動かず、未だに魔王のごとく鎮座している紙面を凝視している。

「……あつ」

俺の口からぽつりと漏れた呟き。だがそれは感動の震えから来るものではなく、落胆と絶望によるものだった。

「えっ? コ、コウくん?」

俺の態度から文恵はなにかを感じ取ったのか、笑顔から急転。心配した顔付きに変わる。

「……ごめん文恵」

そんな文恵に俺はただ一言、

「俺、落ちたよ……」

ただ結果的事実を伝えた。

「っ！ コ、コウくんっ！」

その場でしゃがみ顔を覆う俺に、文恵は悲痛な声を上げる。

ありがとな、文恵。こんな男のために悲しんでくれてよ。でもこれが俺の実力の結果だ。

やはり、身に余る願望だったのだ。主人公にもなれない凡人の俺が、けいおん世界で幸せになるうとするなんて。

届かなかった……。この通り俺は自分の力で舞台にも立てない。そんな無力な俺が、彼女達と同じ世界に仲間入りできるはずもなかった。

ああ、でも悔しいなあ。行きたかったなあ桜高。誰とも仲良しになれなくとも、けいおんの舞台に通えれば、それで十分だったかもしれないな。

「コウくん……」

でもよかったじゃないか俺。桜高には行けなくとも、俺にはこんなに可愛くて優しい幼馴染ができたんだぜ。今もこうして俺のために泣いてくれる天使のような子が。それで十分じゃないか。俺はもうとっくに幸せなのだ。

だから、祝福しよう。彼女が桜高に通えることを。けいおんの物語に出演できることを。

「おめでとう文恵。俺は別の高校になるけど、元気にやって行くんだぞ?」

「そんなあ。コウくんがいない高校生活なんてつまらないよあ……」

文恵……。

「コウくんみたいなおもしろい変人さんなんて、そうそういないんだからあ……」

……何気に失礼だね、この子。

「……ったく、泣くなよ文恵。一生会えないわけじゃないんだぜ。これからもちよくちよく家に遊びに行くし、そっちもこれまで通り俺ン家に来ていいんだぜ?」

「コウくん……」

そう。高校が別々になっただぐらいで疎遠になるような関係なんてまっぴらだ。俺と文恵はこれまでもずっと仲良しだった。こんな程度で壊れるようなヤワな絆じゃない。

ただ残念だけだ。文恵と学生生活を共にできないことが。文恵がシヨックなものもそのことだろう。赤ん坊の頃から中学まで一緒だった奴が突然別の学校に……。

「ん? あれれ?」

改めて合格発表に目を向けた俺は、自分の受験番号を取り出し見比べる。

「ん〜……。あつ！ ごめん文恵！ よく見たら俺の番号あったわ！ 緊張してて見落としてたみたい！ テヘッ！」

突然陽気な声色で合格宣言をすると、文恵は漫画のようにその場でズッコケた。スカートの中見えるぞ？

いやあ、一時はどうなることかと思っただけど俺も無事合格してました！ やった俺！

これで楽しいモブ人生を歩めるぞ！ よっしゃがんばるぜ！

「……………」

「えっ？ ど、どうしたの文恵？」

普段の穏やかならぬ文恵の雰囲気には合格の喜びは吹っ飛び、たじろぐ俺。

「コウくんの、バカアーーーーーーー！！」

文恵が発したとは思えない怒号が、桜高に響くのであった。

「ふ、文恵え。機嫌直しておくねえ……………」

「もう知らないー！」

桜高からの帰り道、文恵は相変わらずご立腹で俺の先を歩いて行く。

(そりゃ不安にさせたのは悪かったと思ってるけど……………)

商店街の道中、ぷりぷりと怒る女の子と情けない顔で機嫌を取ろうとする男に、周りの皆さんは微笑ましいという具合に笑顔を向けてくれているが、俺の心境はそれどころではない。

文恵は怒らしたのはなにもこれが初めてじゃない。しかし今回に限っては、その怒りの度合いが半端じゃない。どうやら真剣に怒りを感じているようだった。

……これは、真面目に謝らなければならぬようだ。

「……文恵。その、本当に悪かったよ。大事な結果発表でふざけたりして。いや狙ってあんなことしたわけじゃないけど……。少なくともあの場でするようなことじゃなかったよな。本当にスマン」

「……」

文恵は未だ背を向けているが、立ち止まって俺の言葉に耳を傾けてくれる。

「でも俺さ、嬉しいぜ。また文恵と同じ学校に行けることがさ。……だからさ、そのお、喧嘩じゃなくて一緒に喜び合いたいなあ、なんて思うんだ。だから機嫌を……」

「心配したんだもん……」

ぼつりと文恵が咳く。若干震え気味でこちらに顔を向ける。文恵の目からはうつすらと涙の雫が浮き出していた。

「私か、コウくんのどっちかが落ちていたらどうしようって……。離れ離れになったらどうしようって、不安だったんだもん……」

「文恵……」

「コウくんが落ちたって言った瞬間、ほんとショックだったんだから……」

文恵はここまで不安がっていたというのに、俺ってば相当無神経なことをしてしまったな、と申し訳なく感じた。

「いや、ほんとスマン……」

「反省してる？」

「してます。ケルマデック海溝ぐらい深く」

「……クスッ。なにそれ？」

「ん？ さては地理の勉強を怠ったな文恵？ いいか？ ケルマデック海溝ってのはニュージールランドの北にある深さ一万メートルを超える海溝で……」

いつのまにか、いつもどおりのテンションに戻り、俺と文恵は笑い合った。

なんだかんで俺達は、こうやっていつも簡単に仲直りできてしまう。それもこれも、人を完全には憎めない文恵が元来持つ大らかさ故だろう。

(でも、これからは文恵の寛大さに甘えないように努力しなくちゃな。いつまでも情けない男じゃいられないし)

そんなことを心中で決意したのだった。

「おっ?」

帰りの途中、俺はある店のショーウィンドウから見えた商品に目が止まった。

「どうしたの?ウくん?」

「ん? ああ、その……」

そこで俺はふとあることを閃いた。

(今日のお詫びも兼ねて……)

「文恵。先に帰ってきてくれるか? ちょっと野暮用できたから寄り道してくるわ」

「えっ? おじさまと明子さんが合格祝い用意して待ってるのに?」

「そんなに遅くはなんないって」

文恵を先に帰して、俺は店に入り、目的の商品を買うことにした。だが買う瞬間、一度思考して少し悩んだ。

ひよつとしたら、この行動が因果律を狂わさないか心配になったのである。だが、けいおん神による警告らしき気配は感じられなかった。

(大丈夫なのか?)

問題ないのならこのまま直行するのみだが、こんな些細な行動にさえ気を使わなければならぬ自分の運命を少し呪わしく思った。

(……けど、思いやりの心すら抑制しなきゃいけないだなんて、まっぴらだっつもの!)

神さまにか、あるいは世界に対して不平をぶつけて俺は商品を購入し、帰路に就いた。

「わはははっ! コウの字も文恵ちゃんも本当よくやった! しかし文恵ちゃんとはかくコウの字まで合格するとはなあ! 大丈夫なのかその学校の基準値は? 明日にでも潰れるんじゃないのか! がはははははっ!」

「不吉なことほざけているんじゃない! 厄病神かなにかかよ俺は! つか普通に祝えんのかアンタは!」

ただいま俺の家で文恵の両親も含めた合格祝いをしていた。親父と文恵の親父さんはすっかり酒が入っており、特にうちの親父のテンションが無駄に高かった。普段からやかましいのにそれがさらに拍車がかっているのだから腹立たしいことこの上ない。

「たく、子どもの合格祝いでこと忘れてねえか?

「あああら二人ともすっかりできあがっちゃって……。ごめんなさいね文恵ちゃん。せつかくのお祝いなのにこんなに騒がしくて」

「あつ、いえ。このほうが私も楽しいですから」

母さんの気遣いに文恵は笑顔で返す。どうやら本当にこの状況が楽しいようだった。

(まあ、なにかイベントがあるたびにこんな調子だったもんな……。つか俺も含めて成長しねえな親父達は)

「ぬああぬいを言うう！ 家のコウの字は確かに変態でバカだが、儂に似て男気を宿している自慢の息子じゃわああい！」

「ふつ。でも光輝さん。家の文恵だって、家内に似ておしとやかな女性に育つてくれましたよ。今時珍しい父親を大事に思ってくれるいい娘だと同僚からも羨ましがられていましたなあ……」

さっきまで仲良く飲んでいた親父達は、いつのまにか自分の子どもの自慢話が始まったらしく、どっちが子どものことをわかっているかでレベルの低い口喧嘩をしていた。

これも恒例なことである。

付き合いきれんと思った俺は、ポケットに入れた物を握りしめ、親父たちに聞こえないよう文恵に声をかけた。

「文恵。ちょっと俺の部屋に来てくれないか？」

「えっ？ う、うん……」

なぜか頬を赤くした文恵を自室に誘い、向かう途中、文恵のお母さんが文恵に「がんばりなさい文恵！ お父さんは足止めしておくから！」「お、お母さん！？」という話声が聞こえてきたが、スル

「しよう。」

「いやだって、やましいことするわけじゃないからね!？」

「な、なに?」
「ウくん」

部屋に入り、両手を合わせて指をモジモジさせている文恵に、俺はポケットから綺麗に舗装された小さい紙袋を取り出し、彼女に差出す。

「これって?」

「今日のお詫びと、俺からの合格祝いだ。親父の前で渡すところかわれるから、ここで開けてみてくれ」

文恵は受け取った袋から中身を取り出す。

「あっ、髪飾り……」

俺がプレゼントしたのは緑色のボールが着いた髪飾りだ。

「文恵っていつもその花柄の髪飾り付けてるだろ? 高校デビューのイメチェンでそういうのどうかなって思ってたんだけど……。ああ、でも俺のセンスだし、気に入らなかつたら……」

「う、ううん! そんなことない! すごく、すごく嬉しいよ……」

文恵は目を潤わして、大事そうに髪飾りを握りしめる。

「そ、そうか? 気に入ってくれたならよかったや」

「うん！　ありがとコウくん。……えへへ。大事にするね？」

文恵は手のひらの髪飾りを眺めながら満面の笑みを作る。

「大事にしてくれるのはありがたいけど、ちゃんと使ってくれよ？
でなきゃ髪飾りの意味ないじゃん」

「うん。でもなんか勿体ないから、付けるのは時々ね。せつかくの
コウくんのプレゼント、大事にしたいもん」

「ん、そ、そうか」

そこまで言われるとなかなか照れくさいものを感じた。それを誤
魔化するために、俺はなにか話題を振ろうとした。

「ええと。そ、そういえば文恵って昔からその花柄の髪飾り付けて
るよな？　なにか思い入れとかあるのか？　そろそろ子どもっぽい
と思っただけど。ソレ」

「……コウくん、憶えてないの？」

「えっ？　なにを？」

文恵の髪飾りに関してなにかエピソードなどあっただろうか？
幼少時代は忘れ去りたい恥ずかしい思い出がわんさかあるので、
すでに忘却の彼方に追いやってしまったのかもしれない。

「……ううん。憶えてなくても別にいいの。些細なことだったし」

そう言って文恵は髪を結んでいる花柄の髪飾りを愛おしそうに撫

でる。その仕草になにかときめくものを感じると同時に、昔のことを憶えていない自分を申し訳なく思った。

「……えへへ。でも高校生にもなって、この髪飾りじゃ、やっぱり子どもっぽいかな？」

苦笑いする文恵に俺はまた無神経なことを言ってしまったなと後悔する。

「あついや。いいんじゃない？ 女の子だったらまだ可愛いらしいものでも。無理に大人っぽくならなくても、大事なものだったら……。それに文恵には似合ってるしな、その花柄の髪飾り」

「似合う……。そつか。まだいいんだ。えへへ……」

照れくさそうに、しかし嬉しそうに頬をかく文恵。

「……あつ！ そういえば私、コウくんになにも用意してない！」

当然文恵はしまったという具合に声を上げる。

「ん？ ああ、別に気にするなよ。俺が勝手にしたことだし」

「ダメ！ 私だけなにもあげないなんてヤダもん！」

真面目な文恵はギブアンドテイクに拘る様子なので、俺のほうが折れた。

「わかったわかった。じゃあ文恵はなにくれるんだ？」

「ええと……」

しばらく熟考した文恵はなにを考えたのか、顔を真っ赤にし、

「……じゃあ、ちょっと目を瞑って、手を出して？」

と遠慮がちに言ってきた。

「ん？ お、おう。」

疑問符を浮かべながら言われたとおりにする。文恵のことだから心臓に悪いサプライズはしないと思いたいが……。

「ねえコウくん……。見た目はまだ子どもっぽくても、中身はいつまでも子どもじゃないんだよ？」

文恵の囁くような、彼女らしからぬ少し艶っぽい声が聞こえたかと思うと、彼女の息遣いが近くなっていき……

「コウの字いい！！ パパはお前のことをよくわかっていることをこの頑固者に言っておくれええいいいい！！」

「頑固者はあなたのほうでしょ！ 光輝すわああああん！！」

突然部屋に乱入してきた酔っ払い親父ーズ。

「光輝さん。あれほど行ってはダメと言ったのに……」

「あなたも酔っぱらっているからといってはしゃぎすぎなよ……」

そして笑顔だが鬼神のオーラを纏う主婦さまがた。ちょ、マジこええです……。

「お仕置きが必要ね?」

「えっ? ちょっと明子さんやい?」

「お、落ち着いてくれ……」

ただならぬ気配を感じて酔いが冷めたのか、親父どもは恐怖に震えだす。

「ふ、文恵ちゃああん!!」

「お、お父さんを助けておくれええい!!」

親父どもは情けない子とに文恵に助けを請うが、なにか文恵にもただならぬ気配を感じるんですけど!

「明子さん、お母さん……」

「ふ、文恵さん?」

文恵は底冷えするような低い声を出し、

「遠慮なくやつちゃってください……」

文恵の了解を得たことで主婦の二人は「OK、まかせろ」という具合にサムズアップし、それぞれ自分の旦那を引きずって行った。

「ぎゃああああああああああつ！！」

断末魔らしきものが聞こえてくるが、俺はなんにも聞いていない…
…いやほんとに。

「……………」

「あ、あのお。文恵さん？ 大丈夫ですか？」

ただならぬ気配を漂わせる幼馴染に対してつい敬語になってしま
う。

「うん。大丈夫だよ。コウくん。うん、大丈夫……………」

と言って極上の笑顔を向けるが、俺にはそれが逆に恐ろしくてし
かたがなかった。

今日の文恵……………いや女性陣を見て得た教訓。

？女性は絶対に怒らせるな……………？ということだ。

(そういえば、文恵のプレゼントって結局なんだったんだ?)

「またもや遠くの彼方から、『どうしてそこだけは主人公スキル発揮するんだ?』というような、けいおん神の呆れた呟きが聞こえてきた気がした……。」

第三話「受験！」（後書き）

というわけでコウくん、なんとか桜高に受かりました。

これからいったい何人の子が彼の毒牙にかかることやら（笑）。

リアルでも受験が本格化ですね。受験生の方々はどうか頑張ってください。

ださい。この小説が少しでも皆さまの気分転換になりますように。

ご意見、ご感想お待ちしております。

間章「光真&文恵の眩き」

Side 小野 光真

ひと悶着あつたが、合格祝いは無事に済んだ。無事にと言ったら無事なのである。

現在時刻は深夜の一時だが、俺は未だ起きて、溜めていたTVゲームを消化していた。

しかし、やっていてもなんだか楽しくない。ゲームがつまらないからではなく、これからのことをいろいろ考えているせいだ。

いよいよ、けいおんの本編が始まるうとしてしている。軽音部の少女達はこれから出会い、絆を深め、様々な物語を紡ぎ出す。でもそこに俺が関与することは……、いや、することができない。彼女達の物語をモブである俺が崩すことは許されないから。

そんなことはとつくに承知していたが、今一度自覚すると、やはりやるせないものを感じる。

自分もその輪に入りたいと、そう思ってしまう。

誰かと恋人になりたいとか、そういうやましい気持ちで思っているわけではない。転生する以前はそう騒いでいたが、そんなものは二の次の理由だった。

本当に俺が欲しいのは、「絆」だった。

軽音部の少女達のような、「仲間」だった。

たった約三年で、軽音部達は強い絆を得て、皆で笑い合う。ときどき衝突もするが、それがきっかけでさらに強固な絆となる。

唯一の後輩、中野梓が入部してからは誰も入部しなかったように、あの五人組は完成されている。誰も入り込めない、彼女達だけの世

界と物語を形成している。そこに異分子である俺が入り込める余地はない。彼女達の輪に入れるのは、同じ運命を背負った者と、神に選ばれた転生者だけなのだ。

俺が彼女達の物語に関わることは一切ない。それが俺に課せられたルールだから。

「GAME OVER!」

考え事をしている間にゲームオーバーになっていた。無機質な電子音が「コンテニユー？」と聞いてくる。

やる気が起きないので、俺はそのままゲームの電源を切った。真っ暗になったテレビ画面に俺の顔が映っている。その顔を見て、俺は自嘲したくなった。

(お前。ほんとに主人公らしい面してないな)

自分の顔に向かって言う。

この身は所詮モブ。俺がいてもいなくてもけいおん世界は勝手に進んでいき、人々を感動させ、笑顔にする物語が生まれる。俺はただ背景に徹するだけだ。

……それでも、それでも俺は欲しいと思う。彼女達のような物語を。彼女達のような仲間達を。

だから決めた。モブならモブらしく、モブ達と絆を深めようと。自分達だけの物語を紡ごうと。

……でもなぜだろう？俺がそこまで人との絆に拘るのは。自分のことなのにわからない。

死んだときのショックが原因なのか、俺の前世の記憶は曖昧なのだ。断片でしか思い出せず、自分がいったいどういう生活をしていたのか、はつきりしない。

自分の行いを思い出して、恥ずかしさのあまり枕を腕で締め付け寝転がった。自分でも驚くほどに大胆なことしてしまったと思う。だって嬉しかったのだ。一緒の高校に通えることが。彼からプレゼントを貰えたことが。喜びの連続で理性が麻痺してしまったのだ。その結果、あの行為に走ったということは……

(やっぱり、そういうことだよな)

私の中でコウくんがどんどん大きな存在になって行く。兄妹同然に育った家族のような男の子を、それ以上の存在として見始めている。

活発で、ときどきちょつとえつちで、たまに変なところで気を使い、そしていつもおちやらけているコウくん。一方で些細なことで慌てたり泣いて、慰めるとすぐケロつとしちゃう、そんな男の子。小さい頃からずっと一緒だった彼のことを、自分のことよりも知っている気がする。やっぱり、いつも目で追っていたからだろう。いつからそんな気持ちを抱いたのかはわからない。こういうのは理屈じゃないのだと思う。

でも、あえて理由付けをするなら、彼の弱さを知ってしまったからだと思う。普段の彼からじゃ気付けない。傍にいなければわからない側面。

小野光真という少年は、きっと誰よりも傷付きやすい。

たとえば、仲のいい友達と話しているとき。楽しそうに笑い合っている中で、コウくんはいつも相手の顔色を窺っている。怒らせないように、不快な思いをさせないように、いつも慎重になって相手のことを考えている。嫌われることが怖いというように。

それは私でも同じだった。私が怒っているとき、コウくんはこの世の終わりのような顔をして、私の機嫌を直そうとする。私はらしくない彼の姿を悲しく思い、いつもどおりのコウくんに戻ってほし

くて、怒りなんて簡単に捨ててしまう。私が許すと、彼は心の底から安心したような顔になるのだ。

コウくんは人との繋がりを求めている。そしてそれが壊れることを恐ろしく思っている。異常なまでに。

私を知る中で、コウくんがそうなってしまった経緯やトラウマはないと思う。いじめなんてなかったし、むしろわけ隔てなく好かれるほうだった。……それとも、私が知らないだけで、昔なにかあったのだろうか。

……コウくんは、時々ことは違う場所を思っているようなときがある。変なことを言っているかもしれないが、そう形容するしかないような様子なのだ。その姿を見ると、私はひどく不安になる。彼がすごい遠いところに、

別の世界に行ってしまうような気がするのだ。

気が付いたら、もう手の届かないところに行ってしまうようで……。

だからときどき彼のことのがすごく怖くなる。得体の知れないなにかを抱えて、苦しんでいそう。それを誤魔化すために、普段は明るく振舞っているのではないのだろうか。

そんな彼を見ていて、私は思ったのだ。

？この人を幸せにしてあげたい？と。

彼の心の闇を理解することはできないかもしれない。でも、できることならなんでもしてあげたい。彼が幸福だと思えるようなことを、したいと思うことを、ぜんぶ叶えてあげたいと思った。

（ああ、そうか）

改めて考えて気付いた。自分はこのなにも小野光真という少年を思っている。もうどうしようもないほどに。

あの行為も彼を幸せにしてあげたい一方で、独占したい気持ち

あつたのかもしれない。

再び頬が熱くなる。彼のことを思うだけで、こんなにも胸が高鳴る。自分が自分でいられなくなる。

「……コウくん」

これから自分達はどうなるのだろう。ただの幼馴染ではもういられない気がした。……いや、いたくなかった。もっと、もっと深いところで思い合っていたい。一緒に幸せになりたい。

だから頑張ろう。コウくんが少しでも自分のことを好きになって、本当の笑顔でいられるように。

そう決心して、私は目を閉じた。夢の中でも愛しい彼に会えるようにと願いながら。

物語は動き出す。日の光の物語と、その影で同時に進行する一人の少年と少女達の物語が。

第四話「入学！」（前書き）

皆さん、あけましておめでとございます。

今年はおだやかな年になることを願っています！

第四話「入学！」

春。

それはなにかが始まる季節。すべての者達に敷かれる新しいレール。新しい可能性……。

漠然か明確であろうと、人々はこの季節に希望を抱くものだ。

そう、いままでとは違う、新しい人生を築きたい、新しい自分になりたいと

……………なぐんてキザっぱいこと言ってるが、要は入学式である。

いよいよ俺のモブとしての人生が幕を開けようとしていた。転生して早十五年……………すべてはこの日のため……………。

ついに、ついに始まるぜ！ 待ちかねていたよ桜高スクールライフ！ 思っ存分満喫して、見事なけいおんリア充となってやる！

……………っと活気付いていたのに、さっそく問題が一つ。

……なんで文恵が別のクラスなんだろう ああああああああ
っ!?

幼馴染の女の子と同じ教室なんて正にリア充主人公の在り様だといふのに、さっそく出鼻を挫かれた気分だ……。これも俺に主人公の素質がないからだといふのか？

けど冷静に考えると、文恵のクラスには唯と和がいたはずだ。突然彼女達と同じクラスになると行動範囲がいろいろ制限されそうだし、まだ慣れないうちにシナリオ本編の近場にいるのは、いろいろ危ういだろう。

とりあえずそうプラスに考えた。

けれど文恵はあまりポジティブに受け止められなかつたらしく、教室移動する際、いつまでも俺が別クラスになるのを心配しているようだった。

というより今朝から文恵の様子がおかしい。いや、態度自体はいつもどおりなのだけど、過剰というか、えらく密着してくるといふか……。

現にいまでも俺の手を握って「大丈夫だからね？」と輝くような笑顔を向けてくれる。

な、なんか今日はずいぶん優しいですね、文恵さん？

合格祝いの日以来、幼馴染の拳動になかなか理解が及ばず困惑しているわたくしです。そんな心配させるようなことしたかな俺？ その後も文恵は「女の子がいつぱいでも舞い上がらないでね？」とか「男の子がいたらなるべく仲良くするんだよ？」とか「式の前にちゃんとお手洗行ってね？ お手々ちゃんと洗うんだよ？」などと小言をおっしゃる。

お前は俺の母さんかっつての!？ てか言われなくてもちゃんと手ぐらい洗うわ!

なんで俺の幼馴染は急にこんな過保護になってしまったのだろうか？
高校デビューを機にお姉さんキャラでも目指すのだろうか？

とまあ、離れることを渋る文恵をなんとか嗜めて俺は教室に向かったのだが

「知らない天井だ」

ってこのネタもう使い古されてるよな……。というか保健室か？
ここ？

なぜか俺はいつのまにか消毒くさい保健室のベッドで横になっていたのだ。

はて、なにがあってこんなところに？

……はっ！ 思い出した！

確か教室に入った途端、俺の目に神々しいお姿が目に入ったのだ！

……そう、なんと同じクラスに琴吹紬がいたのである！

生で見るムギの美しい姿に思わず「むぎゆううう！」と叫び、感動のあまり鼻血を噴出し、失神してしまったのだった！

んん？ 馬鹿らしいだ！？ アンタなムギは天使で女神だぜ？
あんなに気を遣えて器量良しなお嬢さまなんてそうそういねえぞ？
？ 少しでももってちよつと天然で庶民の皆と一緒にしたことしたがる可愛らしいところもあるんだぜ？ 最高じゃん！ 本人を間近で見て興奮しない紬士がどうか？ いや！ いない！ ビバむぎゆうううううう！ 中の人も美人です！

……取り乱しすぎたな。

いやあ憧れのキャラクターを前にして眠らせていた情熱が湧き上

がってしまったが、冷静になりなさい俺。悔しいが彼女と深く関わ
り合うことはない。所詮俺はモブ。よくて、いいクラスメイト止ま
りだ。分を弁えよう。よし、もうメインに浮気(?)しないぞ。
さて、と俺はベッドから起き上がり時計を確認する。

(うわ、入学式もう終わってるじゃん……)

どんだけ気絶してんだよ俺。これじゃクラスでの自己紹介もでき
ないんじゃないか？ 顔覚えてもらえないじゃん……。
いきなり影薄い人になるのはいやだなあ、と頭抱えていると、

「し、失礼します……」

と女の子の遠慮がちな声が保健室に入ってきた。

現在保健の先生は？な・ぜ・か？いない様子だったので答える声
はない。だから必然的に俺が返事をしてあげた。

「ほい。保健の先生ならいまいないよ」

「あつ、起きてたんだ。お、小野くん……」

んっ？俺に用事か？けど聞き覚えのない声だが誰だろう？

……いや、待て！あるぞこの声に聞き覚え！ええと、この声
の持ち主は確か……

記憶を思い起こそうとしている間に、声の持ち主は俺のベッドの
傍に到着した。

まず、その子を一目見たら皆？小さい？と等しく思うことだ
ろう。そして長い前髪で右目が少し隠れがちな鬼 郎を連想させる
おかつぱ頭。

ここまで言えばわかるであろう。

アイドルモブ娘の一人にして、中でも知名度の高い子の一人、木下

しずかである。

(し、しずかだと!? まさか入学早々三年二組(予定)のモブ娘と出会えるとは!)

あれ、でもなんで俺の名前知ってるんだ? 面識はまだないはずだが。

「えーと君は……」

「あつ! ご、ごめんね。わ、私同じクラスの木下しずかかっていうの。さつき、委員会決めて保健委員になったから、小野くんの様子を見に来たの……」

ああ、納得。てかしずかがクラスメイトだったのかよ! ちゃんとかラス表確認しとけよ俺! モブ王として失態だぞ(謎)。

しかし間近で見るとしずかって本当ちっちゃくて可愛いな。おどおどして一生懸命話そうとする仕草も愛らしい。

「ええと、ぐ、具合はどう? 急に鼻血出して倒れちゃったけど、なにか持病とか……」

「あ、いや。そういうのはないけど……」

?ムギ萌え?という不治の病にはかかっていますが。

……てかこの子がさつきからおどおどしているのって、奇行に走った男に警戒しているからじゃないよな? う、うん、違うよね? しずかって人見知りするらしいし。……そう思いたい。

よ、よしここは比較的まともな男子として振舞うよう心がけよう。

「そのお、わざわざありがと。……木下、さんでいいか？ 悪かったな。初日から保健委員の仕事持ち込んだじゃって」

「え？ う、ううん。別に気にしてないよ？」

ううむ。どうも反応が固い。やっぱり初対面の人間と話すことに慣れてないみたいだな。

しかし男子が具合悪いときは男子の保健委員が担当するはずだが、なぜ女子のしずかが？

そのことを聞いてみると、

「あつ、そのこともついでに話しに来ただけど……」

と答えた。

曰く、俺のクラスは俺を含めて男子が十人しかいないらしい。けれど他クラスに比べれば多い方で、委員会を決める際、なるべく男女混合にしたいという教師の要望で、男子全員が委員会に所属することになったようだ。

最後に保健委員だけが残り、その枠を埋めたのが……

「俺ってわけか」

保健委員の相方が倒れたならば、そりゃ、もう一人の保健委員であるしずかが必然的に様子を窺いに来るしかない。

しかし人がいないところで勝手に委員会を決めるとは……。第一なんで今日失神で倒れた男をわざわざ保健委員にするんだろうか？ 謎である。

「え、えと。ご、ごめんね。勝手に委員会決めちゃって。私が謝るのも変だけど……」

しずかは俺の気持ちを代弁してくれた。彼女の言うとおり、しずかが謝る必要はない。にも関わらずちゃんと口にして気を遣ってくれるとは。

(めっちゃええ子やなあ……)

こんな健気な子を前にして「本当だよ！ 舐めんとかゴリア！」なんてブチギれるような奴は真の男ではない。

「いや気にすんなよ木下さん。もともとなにかの委員会には所属するつもりだったし」

「そ、そう？ ならいいけど」

とりあえず体調はもういいのでしずかと教室に戻ることにした。戻る途中、隣で廊下を歩いているしずかを見してみる。

いや、ほんとちっこいな。頭が俺の胸のところに届くか届かないくらいだ。肌だって赤ちゃんみたいに真っ白でつやつやである。

(いけないことだけど、つい抱きしめたくなる愛らしさだなあ……)

「……どうかしたの？ 小野くん」

視線に気付いたしずかは俺に問う。

「あっ、その……」

ムギのように「抱きしめてもよかですか!？」と聞くわけにもいかないし、そんなことしたら途端に変態のレッテルが貼られて俺の人生終了だ。

とりあえずここは、誰もが質問するであろう事柄で話題を広げてもみよう……

「あのさ……。木下さんって一応俺と同じ年だよな？」

瞬間、空気が凍った。

ってしまった! 「小さくて可愛いね」って類のこと言つつもりがまるで小馬鹿にするようなニュアンスになってしまった!

「……………たし……………だもん」

「えっ?」

俺の言葉を聞いた瞬間、しずかは顔を俯かせ、まるで奈落の底から這い上がるような囁きをしたかと思うと、

「私、高校生だもー……………んっ!!」

と大絶叫。

……………えっ?

「なんなの! なんなの!? 今日は皆して『年いくつ?』とか! 『飛び級?』とかいちいち聞いてきてえ! 同級生に決まってるでしょあ! 生徒手帳にちゃんと生年月日書いてあるんだから! ほら見て! 同じ年に生まれてるでしょ!?! ちっちゃくても私だ

持ち上げる。しずかの体は羽のように軽く簡単に持ち上がってしまった。

「ほえええっ!?!? ちょ、ちょっとなにをするの小野くん!?!? お、降ろしてよお!?!?」

「木下しずかくん!」

「はっ、はい!?!?」

「君は自分の魅力がわかっていない!」

「ええええっ!?!?」

俺の主張に戸惑っている様子のしずかに、俺は口を休めず諭す。

「小さいがなんだ!?!? いいじゃんちみっこスタイル! おかげでなにをしてもスゲエ可愛く見えるんだからそういうのに憧れている女の子にとって羨望の対象だよあーた? もっと胸を張りなさいよ!」

そして近くで胸元見ると意外と膨らみあるねあーた! そのギャップがさらにタマランよ! もちろんこっちは口に出してないよ?

「か、可愛い? あ、あう……。で、でもやっぱり小さいといろいろ不便だし……。高い所にあるもの取れないし……。よく他の人に頼んで迷惑かけるし……。小学生料金でまだ乗れるし……。」

最後のちゃっかり得してんじゃん!?

……。じゃなくて。

俺は顔を赤くして悲観になっているしずかにこう言い放つ。

「だったら 俺が君専用の梯子になってやんよ!」

「……は、梯子?」

そう梯子。

まあどう意味かというと……。

「ええとな。真面目な話するとき、持って生まれた特徴にコンプレックス感じるのはわかるんだけど、いちいち悲観的になってたら辛いだけじゃん? だからある程度割り切りつてのが必要だと思うんだよね」

「……」

しずかは黙って俺の言葉に耳を傾ける。

「周りがそのことにツッコンできてさ、これが自分の持ち味なんだあ、って思えば少し気楽になれんじゃないかな? 逆にその持ち味を活かしてプラスにしていくとかさ」

俺だつて抜けてるとことか、打たれ弱い部分をおもしろおかしく外に出すことで悲惨な状況を免れている。

……でも、それでもときどきそんな自分がしょうもないって思うときもある。だからそういうときは……

「それでも、辛いつて思ったときや、困ったときは、誰かを頼りなよ。別に迷惑かけたっていいんだ。足りないところ、できないことを誰かで補う。それが普通なんだから。幸い、いまは同じ委員会に

なった俺がいるし、まずは俺に頼ってみてくれよ。君がコンプレックスに感じていることを全面的に押し付けちゃってくれ。必要なときはいつだって梯子としてお助けするぜ？」

だってそうだろ？ 生まれ持ってしまったものはしょうがないじゃん。それをいいか悪いかかって決めるのは本人次第なんだし。ならいいって思ったほうが人生楽しいに決まってる。

問題なのは他人がどう見るかってだけ。でもまだ彼女のコンプレックスはマシなほうだ。だってなにしても可愛いんだから。

前世の俺なんて……。

……… なにかを思い出しかけたが、不吉なものを感じ、すぐに頭を振って忘れ去る。

そして改めてしずかと向き合おうと。

「……ぷっ、くすくす」

しずかは俺の話の聞いて、おかしそうに笑っていた。

「つまり、私のお助けをするから、梯子ってこと？」

「そっ。取れないものがあって困ったときは遠慮なく俺をお呼びなさい？ 抱っこや肩車でもなんでもして助けちゃう」

彼女は「それはちょっと恥ずかしいけど……」と苦笑いするが、嫌ではないようだった。現にいま俺に抱えられていても、もう抵抗していない。

「小野くんって、変な人だね。今日が初対面なのに、私のこと励ましてくれたりして……。なんだか前から私のこと知ってるみたい」

しずかは緊張が解けたのか、砕けた口調と笑顔を向けてくる。

「そこはいい人って言わない？」

「ううん。変な人なの。だって私の悩んでいたことが急に面白おかしいことに思えてきたんだもん。小野くんの話聞いてたらなんだか馬鹿らしく思えてきちゃった」

……褒めてんのか、けなしてんのかどっちだ？ この子は。

「……でも、嬉しかったよ」

と最後に彼女は付け足す。

「なんかすつきりしたよ。ありがとね小野くん。それと、これから一緒によろしくね。お言葉に甘えて頼らせてもらっから」

そしてぱあつと太陽のような笑顔を向けてくれた。

その姿を前に俺は……

「くあああああああつ！！ やっぱ可愛いでこの子！！ おお可愛い可愛い！ しずかわいいいいいい！！」

愛らしいしずかという名の小動物を抱きしめ、ぐるんぐるんと回転した。

「ひにゃあああつ！ ちよっ！ こいつのはやめてー！ーっ！
！ 目がまわりゅっつうっ！ー！！」

という具合に俺とせずかは仲良く(?) なりましたとき。

……いや、ほんとだよ！ 最初の堅い態度は削り取れたし、メルアドだって交換したんだから！

まあ、委員会の仕事で連絡が必要になるからって理由からだけどね。けどしずか本人は「普通にメールとか電話してきてもいいからね」と言ってくれたので、彼女とのコミュニケーションを深められそうだ。

……ちなみに教室に戻ると、俺はクラスの皆から「鼻血の人」という不名誉なあだ名が付けられた。なんかスケベそうな名前じゃねえか……。あと「『むぎゆううう！』ってなに？」とも聞かれたが、そこは忘れていただきたい……。語源となった本人もいるしね。

そんでもって放課後である。てかほとんど気絶してたから時間が過ぎた感覚がない。

教室を出ると俺の携帯電話に着信。

「……んっ？ 文恵からか」

メールには「一緒に帰ろう」という旨が書かれていたが、今日は買い物の予定があつたので断った。

そのお、地元で買うには少し恥ずかしいオタッキーな漫画を買うので、内緒でわざわざ都心のほうまで出向くのである。

しかし文恵の返信には

？一人で大丈夫！？ 一緒に行くよ！？？

とまたもや過保護スキルを発動してくる。
超プライベートだからヤメテ……と懇願すると理解はしてくれたが、

?迷子にならないように気をつけてね??

とラストに心配のひと押し。

だからお前は俺の母さんかっつての!?

文恵の謎の挙動に頭を捻らせながら校門を目指していると、外に設けられたベンチで一際目立つ人物が視界に映った。

(お、おいおい。もしかしてあれって……)

その美貌は道行く男子だけではなく、女子にさえ注目の視線が向けられるほど。縦ロールと無表情な顔が印象的な、しかしそれが見事に似合っている深窓の令嬢のような美少女。

若王子いちごである。

おそらく三年二組でトップクラスの知名度と人気を誇るであろう、モブ娘を代表する少女だ。

彼女はベンチに座り携帯電話をいじっている。別に特別なことをしているわけではない。

……しかし、どこにでもある日常風景のはずなのに、どうして彼女がそうしていると絵になるのだろう。

その神々しいとまで言っても過言ではない美貌を前に俺は見惚れてしまっていた。

信じられない。こんな美少女がメインではなくモブだなんて。最早そんな身分に収まるようなオーラじゃなかった。いつまでも、見つめていたくなる彼女の姿を凝視していると、

「……私になにか用？」

透き通っていて、抑揚のない美声が俺にかけられた。

って、え？

「あっ……」

やけにいちごの姿が近くになってきているなあ、と思っていたら、なんのことはない。俺が無意識に彼女に近付いたらしい。隣に座ろうとするぐらいに接近している。これは不審になって声をかけられるに決まっていた。

「あっ、あのですね……」

まずい。なんて言えばいいんだ？ だってなんの接点もないのに急にフレンドリーな態度を取っても不思議に思われるだけだし……。俺はあたふたして目を泳がせていると、いちごが持っている携帯電話に目が止まった。

（はっ、そうだ！）

この窮地を脱するため、俺はとっさに閃いた手段を実行する。俺は自分の携帯電話を取り出し、彼女の前に差し出して叫ぶ。

「あの！俺とメル友になってくれませんか！？」

「……………え？ やだ」

案の定、断られた。しかも彼女の名言で。

わあい。いちこの名言で切り捨てられたよお？ 嬉しいなあ……
わけねえだろ！ 恥ずかしいし悲しいよ！ なに新入した大学生み
たいなノリでメルアド聞いてんだよ俺！？

いちごもなにか警戒するような冷めた視線で俺を見てくる。
な、なんだ？ この女王に見定められるような気分は……。

「……なんで知らない人にいきなり個人情報と連絡先を教えないと
いけないの？」

……………ごもつともである。

「あなた、ナンパのつもり？ けど最近のナンパだって少しは節度
守るわよ？ もうちよつとうまい方法があるんじゃない？ いまの
だと直球過ぎて引かれても文句言えないわよ？」

……………正論過ぎて返す言葉もない。

「正直なのはいいかもしれないけど、時と場合を選びなさい。じゃ
ないとただの変態だし」

彼女はズバズバと毒舌を放ち俺の心を抉ってくる。

ていうか滅茶苦茶喋るじゃないかこの子！ どこが無口でクール
やねん！ むしろドSだよこれじゃ！

いや、言ってることは全然間違っていないが……

だがしかし！ 俺の名誉のために一応反論はさせていただくぞ！

「ま、待ってくれ！ 俺は別にナンパのつもりで聞いたんじゃない！ 純粹にメル友が欲しいと思ったからだ！ ほら。今年から共学とは言えここ女子ばっかだろ？ だから男子って理由で孤立しないように女子との交友関係を増やそうと思って……」

ちなみにこれは嘘じゃない。友達を増やし、学生生活を充実させるために俺はここに来たのだから、主張自体はズレていない。まぎれもない本心である。

だから決してナンパではないのだ！

「……なるほどね。理由はわかったけど」

おう！ わかってくれたか！

「なら、なおのこと私の連絡先を聞く必要はないんじゃない？ 別にクラスの子でも事足りるんだし」

さらに反論の余地がない正論を言い返される。

だ、だめだ。話し合いで彼女に勝てる気がしない。

俺が頭の中で言葉を探っているうちに、いちごはベンチから立ち上がり、俺に背を向けてしまった。

うわあああつ！ 俺の第一印象最悪だああ！！ ていうかこの先のいちごのコミュニケーション消滅したも同然じゃないか！

俺は膝をつき、いちごとのコミュニティを失くした愚かな自分の失態を嘆いた。

しかし、そんな俺にいちごは背を向けながら言葉を投げてきた。

「いまは無理でも、この先なんらかの関わりを持つようなことがあれば、連絡先教えるの考えてもいいわよ？ 関わるようなことがあれば、だけどね」

「えっ？」

同情か憐れみか、またや合理的な判断か、彼女は補足するようにそう言い放った。

えと、要約するとまずは知り合ってからってこと？

……なんだ。きつい態度と物言いするけど意外と懐広いじゃないか。

彼女は俺をただ切り捨てるだけではなく、どうすればいいのか、ちゃんと道を示してくれた。

正義心が強い彼女だからこそ、中途半端な拒絶はせず、自分の発言に責任を持って、妥当な意見を相手に提示してくれる。

それを呼吸するかのようになす、若王子いちご。

(なんつうか、本当にいい女だな……)

こりゃ人気が出るのも頷ける。ルックスも中身も彼女は完成され過ぎている。

少し、憧れるかもな。そういうの……。

いちごの凛々しく綺麗な後ろ姿を見て、そう思っただった。

「じゃ、引き続き友達探し頑張りなさい。ナンパさん」

「だからナンパじゃないつうの!」

そして落とすところは落とす……。

「はあ、なんか数年分の労力を使い果たした気分だ……」

あの若王子いちごと対話するのは並大抵の力では厳しい。あれはラスボスの風格だ。果たしてこの先、彼女と仲良くなることはできるのだろうか？

(とりあえず気持ち入れ替えて、目的の物買いに行きますか……)

都心にあるアニメグッズが豊富な店に向かうため、俺は電車に乗って揺られ揺られる。そしてなんとか目的のコミックは購入できた。

(ああいう同好の人達が集まるような場所だと気兼ねなく買えるよな)

帰りの電車で戦利品を買えたことに満足しながら、俺は今日のことを思い返していた。

(しかし、今日だけで二人もの三年二組のモブ娘に出会えるとは)

仲良くなっていない者が一名いるが、出会いがあること自体奇跡的なことだ。なかなか幸先がいいと感じる。これは三年生になる前にほとんどのモブ娘に出会えるかもしれない。

(いやそれは期待しすぎか。それこそどんな主人公だよって話だし……)

しかし、俺の予想は裏切られることがお約束なのか、さらなる出合いが本日ラストに残っていたらしい。

(えっ？ あれって……)

同じ車両の向こう側に立っている人物に俺は目を見張った。

黒髪のおさげ。細くて女性らしいラインを描いた長身。そして泣きぼくろが特徴的な女の子。三年二組モブの一人、遠藤未知子がそこにいた。ちなみにエンドウという名前からあだ名は「ママ(公式)」である。

(マ、マジかよ！ まさかママちゃんとも出会えるなんて！)

アニメでは残念ながらセリフも出番も恵まれなかったが、その女の子らしい整った容姿からファンも多かったモブ娘である。実は前世では一番気になっていた子だ。そんな彼女を間近で見られることに感動を覚えたが、少し様子がおかしいことに気付く。頬を赤くし、必死に苦痛に耐えているような……。

そして気付く。彼女の背中に異常に密着して、不審な動きをしているサラリーマン風の男がいることを。

(痴漢だ……)

通勤ラッシュほどではないにせよ現在の車両は少し混雑している。しかしあれほど密着が必要なほど混雑しているわけじゃない。一人分のスペースは十分にあるはずだ。事故ではなく、意図的に痴漢していることは明らかだった。

(つうか、こんな遠目でも気付けるのになんで近くにいた奴は気付かない！？)

すぐにわかった。皆見て見ぬふりをしている。

止めようかと迷っているような素振りを見せる者もいるが、けつきよく関わるのがいやなのか、誤魔化すように携帯電話をいじり始める。

（なに考えてんだよ！ 悪いのはあつちなんだから堂々と「痴漢です！」って言えばいいだけだろ！ ……なんで、なんでどいつもこいつもこういふときばっかり無関心を装うんだ！）

理不尽な出来事に腹立っていると、前と同じように俺の脳内でビジョンが浮かび上がる。

ガクランを着た、いかにもガラの悪い連中が数人で一人の男子を蹴り上げている。それを見て見ぬフリをして去る周りの人間達。

こつちに来てからの記憶じゃない。これは俺の……。

幻影が消える。そして覚悟する。

人間、巻き込まれたくないから我閉せずの姿勢を貫く。きつと誰かがなんとかしてくれる、助けてくれるって勝手に思い込んで。

でも、そんな考えを持つ奴しか周りにいなかったら、けつきよく誰も助けてはくれない。

前世だったら、俺もそんな人間の中に含まれていたのかもしれない。

けれどいまは……。

俺は人垣をかきわけるようにして前進する。脳にはすでに怒りの撃鉄が引かれている。

（俺はそういう人生がもういやだから、この世界に来たんだ）

放つべき怒声という名の弾丸は、喉元に収められる。

(俺は変わる。変わらなきゃだめなんだよ！ なにより……)

右手は目標の腕を掴み、

(俺がファンとして慕う女の子を傷つけることは許さない！ 例え、まだ関わっていなくても……、その子が泣いているのなら手を差し伸べる！ 助ける！)

煮え滾る怒涛の弾丸が、口から放たれる。

「じ、ここここによ、ここよ、ここよ、ち、ち、痴漢野郎う！ しよ、しよ、しよの子からて、て、手を離せい！ こ、この変態いいい！」

放たれた弾丸は勢いよく発射されたかと思いきや、暴発して銃身に羞恥という名の破裂を起こさせた。

顔真っ赤にしてどもる俺の方が不審者扱いされました……。

とりあえず鉄道警察で事情を説明することになったが、痴漢はまったく認めようとしない。しかも、警察が前にいるときに限って善良な社会人のふりをしてやがる。

「だからはつきり見たんですって！ こいつがこの子に痴漢しているところ！」

「混雑していたからそんな風に見えたかもしれないけど、誤解ですよ。坊や。君のその正義心には世間から見たら賞賛に値するけど、

だからってこういうのは困るよ。私はこれから取引先に向かうところなんだから勘弁してくれ」

む、むかつく〜！ まるでこっちが狂言扱いされるような方向に持っていきやがって！ 警察もなんか向こうの方を信用し始めているような感じだし！

「う〜ん……。で、君。本当に触られたの？」

直球で被害者である未知子ちゃんに聞いてくる警察。もう少し言い方があるだろうに！

「そ、それは、その……」

まだ落ち着いていないのか、はっきりと口に出すことができないようである未知子ちゃん。

「……」

本人が明言しない限り、痴漢事件はうやむやになって、無かったことになってしまう。だからといって、俺から彼女を後押しして発言させても解決にはならない。それじゃあ強制させたと思われ信用してもらえない。なにより一番大事なのは、彼女が自分自身で言わなければならぬということだ。

だから俺はただ彼女を信じて、まっすぐ見つめることだけにした。

「……ふー。ご本人もはっきりしませんし、もういいじゃないですか？ そろそろお暇させてもよろしいでしょ？ 私は急いでいるんです」

男は席を立とうとする。

「おい、逃げるのか？」

「君もいい加減にしなさい。その年になっていつまでヒーローごっこしているつもりだい？ 善意ある行動が他人の迷惑になることぐらい覚えたまえ。これ以上言うなら痴漢冤罪として訴えるよ？」

俺の挑発的なもの言いから、温和な態度を緩めて、不快な表情を浮かべ法律を持ち出してくる男。化けの皮が剥がれてきやがったな。緊迫した空気が辺りを包む。

警察がまあまあと落ち着かせようとしたときだった。

「そ、その人……。私に触りました！ 間違いありません！」

未知子ちゃんが男に指をさし、ついに高らかに宣言した。

「き、君までなにを……。だいたい仮に痴漢があのとときいたとして、それが僕っていう証拠は……」

「あ、あのっ！」

交番の入り口から声をかける中年女性の声。全員の視点が彼女の方へ向く。

（あの人。たしか同じ車両に乗ってた……）

近くで痴漢事件が起きているのに、見ぬふりをして携帯電話をいじってた人の一人だ。

「わ、私もその男の人がその子に痴漢しているの見てました！ 証拠もケータイの動画で撮ってます！」

自分の携帯電話を取りだし、動画を再生させる女性。そこにははつきりと鼻の下を伸ばして未知子ちゃんにセクハラする男の姿が映っていた。

うわぁ……だらしな顔……。

そうか！ この人が携帯電話をいじっていたのは動画を撮るためだったのか！

グツジョブ！ おばはん！

「これは、動かぬ証拠だな。本署まで来てもらおうか」

男を連行させようと警察が動こうとした刹那……。

「く、くそがあああああ……！」

男は往生際悪く逃亡しようとした！

「なっ！ 待たんかこの！」

開き直りやがったのか、態度を一変させ錯乱状態になっている。

「！」

入り口から逃げようとする男の前に、未知子ちゃんが逃がさないために立ちはだかった。

「どけ！ 小娘が！」

「あ、あぶない！」

男は拳を未知子ちゃんに振り上げ殴ろうとする。それでも未知子ちゃんは退こうとせず、両手を広げて立つ。

(間に、合え！)

俺は足に全力を込める……。

ゴギツ！

「っ！」

鈍い音は未知子ちゃんからではなく、俺の頬から鳴った。

(か、間一髪……)

なんとか彼女を庇えた。

「ガキが！ 舐めやがって！」

男はさらに激高するが、すでに警察に押さえ付けられていた。

「痴漢に限らず、暴行まで加えるとは。覚悟はできているな！」

泣き喚く男を警察は連行していった。

「いてて……」

「だ、大丈夫？」

未知子ちゃんが俺に心配の声をかける

「あ、ああ。平気、平気」

「でもすごく腫れてるよ？ こっち来て」

「え？ う、うん」

未知子ちゃんに手を握られたことで少しドキドキしながら、俺と彼女はホール内のベンチに移動した。

未知子ちゃんはハンカチを水道で濡らしてきて、俺の頬に当ててくれた。

「染みる？」

「いや、気持ちいいよ。ありがとう」

お礼を言われて安心した笑みを作るが、すぐに申し訳なさそうな顔になる。

「ごめんね……。私が無謀なことしたせいだよ」

どうやら彼女は自分の行動のせいでこうなったことに罪悪感があるらしい。

「え、いや。気にしないでよ。こっちだって勝手にしたことなんだから……。それに、君がやったことは勇氣ある行動だったと思うよ。確かに無防備で危なかったけどさ、その心意気自体は間違いないはずだって」

「でも……」

「気にしない気にしない。それに君みたいなかわいい女の子が殴られるだなんて、我慢ならなかったし」

「えっ」

「って、また悪い癖で余計なこと言っちゃったよ俺！

気になっていた少女が目の前にいることで、いろいろテンパってしまっているらしい。

未知子ちゃんは俺の発言に頬を赤くし俯いてしまう。俺も気まずさから、しばらく沈黙が続く。

なにか話を切り出すべきかと試行錯誤している間、先に沈黙を破ったのは未知子ちゃんだった。

「……その制服、同じ桜高だよね？ 一応同級生でいいのかな？」

「え。あ、ああ。そうだな。自己紹介してなかったな。俺、小野光真。クラスは……組」

俺が名乗ると彼女も名乗る。俺は未知子ちゃんのことはずでに知っているのだが、向こうからすれば初対面なので、合わせることにする。

「同い年なんだ……。すごいね、小野君。同い年なのに、私と違ってすごい勇気があるんだね」

「え？ ……いや、あの、え？」

どこか尊敬するような眼差しで、未知子ちゃんは俺を見る。慣れないその視線に俺は戸惑ってしまい、上手く言葉が返せなかった。

「……意外と、声って出せないものなんだね。いざとなると」

未知子ちゃんは自嘲するように呟く。

「私すぐに『痴漢です』って叫ぼうとしたのに、怖くて全然声でなかったの。自分でも驚くくらい。それで、周りの人も気付いてるのに助けてくれなかった。それが悲しくて、そして勇気が出せない自分が悔しくて……」

俺は黙って耳を傾けた。

「でも、小野君が助けてくれた」

そして再び潤った瞳で俺を見つめる。若干、頬が赤い気がした。

「すごく、嬉しかった。誰も助けてくれないって思っていたから」

「あ、当たり前のことしただけだって！」

未知子ちゃんの妙に熱い視線に耐えかねて、俺はあたふたしてしまふ。

まずい。すごい顔が熱い。

そんな俺に構わず、未知子ちゃんは瞳を輝かせる。

「当たり前だって思われてるものほど、なかなかできないことだと思っ
うよ？ だから、すごく勇気がある人なんだあって助けられたと

き思った。……ほんと、すごいと思う」

ほ、褒めすぎではないだろうか。

というより、こちらとしては声が裏返ってしまったことが恥ずかしくてしょうがないのだが……。彼女の中でのときの状況が若干美化されているような気がしないでもない。

「小野君が助けてくれたのに、私ったらまだ怖がって、あの人が痴漢したことはつきり言えなくて……。痴漢が帰ろうとしたとき、どうしようって焦ったんだけど、そのとき『逃げるのか？』って小野君が言ったでしょ？ その言葉、私にも言われた気がして、勇気を出して言わなくちゃって思えたの。だからあんな行動もできたんだ」

そう言って未知子ちゃんは俺の手を握る。俺は頭が沸騰して汽笛が鳴るのではないかというぐらい激しく紅潮する。

だ、だって、憧れの未知子ちゃんが俺の手を、手を！

「本当にありがとう、助けてくれて、勇気をくれて」

トドメになんとも可愛らしい微笑みで、俺の心を幸せで完全にノックアウトさせる。

(ああ、生まれてきてよかったよ、俺……)

やっぱり未知子ちゃんはとんでもなく可愛い。背が高く、プロポーションも良くて、笑顔が素敵だ。それに加えて大人しそうで女の子っぽい見た目だから、不謹慎だけど痴漢に狙われやすかったんだろうな……。

けど、今の彼女を見ていると、もうこの先痴漢に遭っても自分で対処できる勇気を持っていると思った。根拠はないが、彼女の力強

く眩い目を見ているとそう思えた。

「ねえ、連絡先教えて？ 改めて、お礼がしたいから……」

というわけで、未知子ちゃんともメルアドと電話番号を交換した。交換する際、しずかには悪いが、彼女ときと比べものにならないくらい緊張した。それと同時に舞い上がるほど嬉しかった。

(こんなに早く憧れの未知子ちゃんと仲良くなれるなんて……)

感動のあまり涙が出そうになった。

別れ際、未知子ちゃんは「……いつでも連絡していい？」と聞いてきて、俺は「もちろんさ！」と即答した。バツチ来いである。

彼女は安心した表情になり、「小野君も好きなきに連絡してきてね」と笑顔で手を振った。

いやあ。ほんと未知子ちゃんは可愛いなあ、連絡し合えるようになって嬉しいなあと、俺はにやけ顔&スキップして歩くという傍から見たらキモいことこの上ない有様で帰宅していた。

(しかし、歓喜のせいか身軽な気がするなあ。なんか荷物があったような気がするが……)

そこで気付く。買った漫画が手元にないことを。

(しまったあ！ いざいざの後つい手を離してどこかに放置してしまった！)

ま、まずい。あんなきわどい内容のものを誰かに拾われたら！
……いや待て。冷静になれ。誰かの落とし物なんて、拾った人はわからないだろうし……、名乗り出なければ俺が持ち主であることは明かされない。

うん、そうである。あの本を失ったのは惜しいが、社会的に死ぬよりはマシなはず……。

しかし、世界はどうやってでも俺を喜劇の人物にしたいのか、俺にとって死刑を告げる出来事が到来する。

俺の携帯電話からメールの着信音。開くと、送り元は未知子ちゃんからだった。

まさか、と思い、俺は恐る恐るメールの内容を見た。

？さっそくメールしてみました（^^） あのね、小野君が帰った後ベンチで本が置いてあるのに気付いたんだけど、これ小野君のだよね？ 今度会ったときに渡しますね それじゃあ、また（*^^*）ノ？

（ぎゃあああつ！ よりによって未知子ちゃんに拾われたあ！ お願いだ〜！ 中身は見ないでくれえええ！）

彼女に限ってそんなことはしないとかが……。もし見てしまつたら、痴漢があつた手前、一気に幻滅されてせつかくの関係があつけなく崩壊してしまいそうだ……。

（やっぱりここは注意のメールを……。ああ！ でもそんなメールしたら露骨すぎるし、いったいどうすればあああ！）

その夜、本の中身が未知子ちゃんに見られないことを祈りながら、ずっと悶々して寝れませんでした……。

今日、彼が出会った、三人の少女。

そして幼馴染の少女を含めたこの四人を中心に、彼の物語が動き出すことを、もちろん彼は知るはずもなかった。

第四話「入学！」（後書き）

大分間が空いてしまいましたが、一日置きの記事の投稿は調子のいいときに限られるので、基本的にはこのペースです。

それでもがんばって早めに更新していきなあと考えています。

ついに入学です。ヒロインも増えました。やったねコウちゃん！

一応、木村文恵、木下しずか、若王子いちご、遠藤未知子、この四人がメインヒロインの予定です。だからといって他のモブ娘を蔑ろにするわけではないので、そこはご理解ください。希望によっては増える可能性もあるかも。

（四人中心にして動くって書いたじゃねえかよ？）

ま、まあいいじゃん？

ご感想、ご意見お待ちしております。よいお正月を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276z/>

けいおん！モブ王

2012年1月2日01時45分発行